

## 1 はじまり

\*

人々は、この国を『賢者と巫女の国ティシヤナ』と呼ぶ。

そう呼ばれるには幾つか理由がある。その一つにティシヤナ聖王都の人口の半数が、賢者又は巫女関係者であることが言えよう。

ティシヤナ国は、王家を頂点とした王権国家であるが、その政は王の独断で行われることはない。政治は巫女が受ける神託と、賢者の膨大な知識が政の方向性を決めている。

——この物語は、そんな国の中から始まる。

お話の前に、二つの家の名前を紹介したい。

賢者の最高脈家系　ロイト家

巫女の聖なる家系　ファイファー家

この両家は、王の側近として仕えることを命じられていた。特にロイト当主家に最初に生まれた男子と、ファイファー当主家に最初に生まれた女子は重要視された。

ロイト家の子息は王を補佐する参謀として、そしてファイファー家子女は王の相談役として仕えな

くてはならない。王は彼らの忠誠に応え「賢王」「巫女王」の称号を与え、王都全ての賢者と巫女の管理を任せるのだ。

ティシヤナ暦四五二年の初冬。

この年、ロイト・ファイファーの両当主家に、玉のような男子と女子が生まれる。そう彼らがこのお話の主人公達だ。

\* \* \*

最初に生まれてきたのはロイト家の長子。そして数日の差でファイファー家の長女が誕生した。

ティシヤナの国民は、この二人の赤子の誕生を自分のことのように喜び、祝いの歌を謳い、大いに騒いだ。その祝賀は、現ティシヤナ王の娘クローディア王女が生まれた時よりも盛大であったという。普段は冷静な賢者と巫女達も、この時ばかりは自分達の未来の指導者の誕生に浮かれた。

国中がこの数日の間、祝いの花の香りと明かりに包まれた。

しかしその祝いの騒ぎの中、一人大いに頭を抱え悩む者がいた。それは現ティシヤナ王その人だ。た。

ティシヤナ王は、誰もいない執務室の窓から祝いの明かりを見ていた。黙って外の様子を見ていた

かと思うと突然大きな溜息をつく。

その溜息は、堅固な王城の窓を突き破り、今にも外に漏れ出してしまいそうなほど深いものだった。国内は祝いのムード一色だというのに、どうしてしまったのだろうか。

「私は、いったいどうしたらいいのだ」

王は、窓ガラスに映る自分に話しかけてみる。当たり前だが答えが返ってくるはずもなく、無駄な事をしたと再び溜息を繰り返す。

王をここまで悩ませているのは、今、国内の主役になっているロイト家とファイファー家が原因だった。実はこの両家、いつの頃からか犬猿の仲として有名な間柄になっていた。

両家は賢者と巫女を代表する家柄だ。現在その不仲は、賢者と巫女の世界にも伝染しつつある。このままでは、国の根幹を揺るがしかねない事態だ。王はこの諍いを自分の代で解消したいと考えていた。しかしどうにも上手く事が運ばず、現在に至ってしまっている。

王は自分の服の裾が下に引っ張られていることに気付いた。これはどうしたものかと視線を下に向けると、自分の足にまとわりつく愛娘を発見した。

「ねえ、おとうしやまあ」

王は考えに没頭するあまり、愛娘が自分の傍に来たことに気がつかなかった。

「おや姫よ、来ていたのか」

王は娘を胸に抱き上げた。

「クローディアなんども、おとうしやまよんだのに！ おへんじなかつたあ」

彼女は、ティシヤナ王の一人娘クローディア王女だ。王と同じルビー色の髪をしており、エメラルドグリーンの澄んだ瞳がとても生意気そうだ。そして今はなぜか、可愛い頬をぶつくりと膨らませ怒っている。

今年で三歳になったクローディアは、最近扉の開け方を覚えた。そのため王の執務室にも自由に入れるようになった。しかし勝手に入って来られるのも困るので、王はクローディアに部屋に入るときは扉をノックするよう教えた。今日はその言付けを守ってノックをしたのだろう。しかし王は、思索に耽るあまり、その音に気づかなかつた。

「それはすまないことをした、どうか父を許しておくれ」

一国の王とはいえ人の親。王は怒る愛娘に目じりを下げながら、懸命に機嫌をとる。

「どうしようかな」

クローディアは、そんな父王の腕の中で、父を許してあげようか考えているようだ。

「そうだクローディア、良い事を教えてあげよう」

王は、クローディアを抱いたまま窓辺に近づいた。

「なに？」

「窓の外を見てごらん。とても綺麗だろう」

「うん」

クローディアは、窓に両手をつけて外を見下ろした。日が落ちかけたティシヤナの王都は、街中が

祝いの明かりでキラキラと輝いており幻想的だった。

「キラキラしててきれい」

「みんな、そなたに可愛い弟と妹が出来たお祝いをしているんだぞ」

「おとうとといもうと？」

「そうだよ。そなたの半身となる大切な子達だ」

王には、クローディア以外に子がいない。王妃は病弱のため、子供は彼女以上望めないかもしれない。そうなれば将来テイシヤナ国の王になるのはクローディアだ。そして女王となったクローディアを支えるのは、生まれてきたばかりの二人の赤子達だ。半身というのは大げさな例えではないだろう。

現テイシヤナ王にも賢王と巫女王という強い支えがいる。

クローディアは二人と歳が近い。出来れば三人きょうだいのように寄り添ってくれればと、願わずにはいられない。

「ほんとお」

「ああ仲良くしてやれるか？」

「うん、なかよくするよ！ クローディアおねえちゃんだもん！」

王は、娘の喜ぶ姿に顔を緩ませた。——その時であった。

「……そうか、良いことを思いついたぞ。クローディア、そなたのおかげでいい案が浮かんだ。お手柄だ！」

王はそう言うとお愛娘の頭を撫でた。

「……えっ？ クローディアおりこうさん」

幼いクローディアには、父が何を言いたいのか分かるはずもないだろう。しかし褒められたことだけは分かったようで、そのことを素直に喜んだ。

「よし、善は急げだ！」

王はクローディアを床の上に下ろすと、部屋の扉の方へ歩いてゆく。クローディアはそんな父王の後ろ姿をじつと見つめた。

王は執務室のドアを開けると、一国の王らしい張りのある声を廊下に響かせる。

「誰か、誰かあるか！」

\* \* \*

その日の夜遅く。ロイト家とファイファー家の当主は、王城に召喚された。

「王よ。夜分遅くに何事でしょうか？」

謁見の間に通された両家の当主は、何事かと慌てふためき心穏やかではいらなかった。その場には、王城に常に詰めている現賢王と巫女王の姿もあったからだ。これは只事ではない。

現賢王と巫女王は両家当主の兄と姉に当たる人物だ。両家の主要人物が謁見の間に勢ぞろいしていることになる。

「こんな時刻に呼び出してしまつてすまない。よく来てくれた」

王は玉座から立ち上がると、頭を垂れている両家の当主の前まで歩み寄り、両人の手を取ると顔を上げさせた。

「王よ。必要とあらば、いつでもお呼びください」

「我らはそのための臣下です」

「そなたらの変わらぬ忠誠ありがたく思う、実はそなたらに折り入って頼みたいことがあるのだ」

王は、娘のクローディアの言葉をヒントに、ロイト、ファイファー両家の関係を修復するアイディアを思いついていた。

「王よ……」

「どうかご存分にご命令ください」

そう言うと両家の当主は、再び頭を垂れる。

「これは両家にとって重荷を強いる事になる……それでも聞いてくれるか？」

「ご命令ください」

両家の当主は、声を揃えて王に告げる。しばしの沈黙の後、王は静かに両家の当主に語りかけた。

「……そなたらの子息子女だが、私に預けてはもらえないだろうか？」

「それは……」

「どういう意味でしょうか？」

両家の当主は、王の思いもよらない命令に驚きの表情を浮かべる。王は二人の反応をあらかじめ予

想していた。現賢王と巫女王に相談した時も同じような反応をされたからだ。

王が両家に出した提案というのは、ロイト家に生まれた長男と、ファイファー家の長女を、王が引き取り城の中で一緒に育てるというものだった。

「王よ。それはお受け出来ません」

「確かにあの子たちは、近い将来、国へ忠誠を尽くすことを定められた子です。しかし子供時分は親元に置かせてください」

王は反対を受けるのを覚悟していた。王も人の親だ。自分がどんな酷なことを臣下に命令しているのか十分理解していた。しかし王は決断したのだ。

「そなたらが言いたいことは分かる」

「王よ。よろしいでしょうか」

その時だった、傍らに控えていた賢王と巫女王が隣に歩みよってきた。二人はお互いを見てアイコンタクトを交わすと、巫女王が語りはじめる。

「話に割り込むのをお許しください。少しでも私達の意見をお聞き届け願えませんか？」

「もちろんだ。言ってくれ」

「ありがとうございます」

賢王と巫女王は、王に頭を下げて礼をのべる。

「あの子たちの定めは、私たちがこの身で体験し知り得ていると思っております」

巫女王が静かに語りかける。賢王と巫女王候補の子供は、慣例により定められた年齢になると親元



から離された。そして各々の修行に入る。それは現賢王と巫女王も経験している。

「確かにそうだな」

「年端もいかぬ子供が親元から離れるのは、とても心細かったのを覚えております。また将来己が政に携わるといふ重圧は、私達の心に重く押し掛かっておりました……ですので、今から城に出入りさせて慣れるのは、良い事に思えます」

「私達は、王の意見に従います」

賢王は、巫女王の語るのが終わるのを待つて自分の意見を付け加える。

「では！」

「王の手元に置くことに賛成いたします」

王は驚いた。なんと現賢王と巫女王は、王の味方に付いたのだ。両家より先に王の提案を聞かされた二人は別室で意見を交わし、先に結論を出していたようだ。しかし、王より驚いたのはロイト家とファイファー家の当主達だ。賢王と巫女王は、身内で自分たちの味方であろうと思っていたからだ。

「兄上！」

「姉上！」

両当主は、ほぼ同時に兄と姉に抗議の声を上げる。

賢王と巫女王は、家同士が犬猿の仲だが、王を支える参謀と相談役としての立場で争う事はない。王と国を何よりも最優先にするよう幼い頃から教育されている。

「何も引き離す気はありません」

「きちんとあの子達への最善の策を話し合おうじゃないか」

その後、王と両家の当主、賢王と巫女王を交えた話し合いは朝方近くまで続いた。結果両家の子供は、現賢王と巫女王と同じ敷地に身を置き、両家が指定した教育係の教育を受けることが決まった。そして王は、両親の面会はいつでも自由に出来る事を約束した。

\* \* \*

しばらくして、二人の赤子は王城へと招かれた。生まれたばかりの赤子は、自分たちが置かれた状況など知るよしもなく、揃いの寝台の上でスヤスヤと寝息を立てている。

王はクローディアを伴い、子供部屋へ二人の様子を見に来た。

「ちっちゃい。かわいい」

クローディアは、二人の赤子を前に目を輝かせた。そして彼らの乳母に自分も赤子の世話をさせてくれとねだる。

子供部屋には、暖かい時間が流れている。

王は、その姿を少しだけ離れた位置から見守った。この子供達が兄妹のように育てば、必ず両家の険悪な仲も和らぐであろう。そして王女クローディアを姉として慕いまとまってくれば、国の政は必ずや鉄壁なものとなろう。そう願わずにはいられない。

## 2 帰郷

\*

昼下がりの午後。いつもは静かな城の一角が何やら騒がしかった。それは小さな子供達の声のようだ。

「キール！ クローディアおねえちゃん！ 私も一緒に連れてって！」

少女の高い声が王城に響く。少女の名は、ラヴィリア・フォン・ファイファー。ファイファー家の長女だ。彼女に近い者は彼女を『ラヴィ』と呼ぶ。そのラヴィリアは城の壁をよじ登り、窓の枠に足をかけ淵に立つと外へ身を乗り出す。吹き上げる風が腰まである藤色の髪を舞い上げる。

今、ラヴィリアがいる場所は王城の三階だ。窓から地面まで十メートル以上はある。しかしその高さには恐れることなくアメジスト色の瞳が地上をまっすぐ見下ろしていた。

「ラヴィ、それは駄目だよ！」

彼女の声に答えたのはキールクライン・フォン・ロイト。ロイト家の長子だ。彼に近い者は彼を『キール』と呼ぶ。彼は丁度ラヴィリアの眼下の中庭にいた。

キールクラインの髪は、オリーブ色で独特の癖毛で四方に跳ねている。瞳の色は濃いグリーンだ。

「そうよ、危ないから窓から降りなさい」

ラヴィリアに命令をしたのは、キールクラインの横に立っているルビー色の髪を持った少女だった。彼女は、ティシヤナ国第一王位継承者クローディア・ルン・ティシヤナ王女。クローディアは、ラヴィリアとキールルより三つ年上で、二人の姉のような存在であった。横に立つキールクラインより頭一つ分背が高い。二人は王族と貴族なのだが、今日の二人は身分に不釣り合いな質素な服に身を包んでいる。クローディアはこれより城外へお忍びの視察に出る。キールクラインはその視察に同行する事になっていた。

「なんで駄目なの！」

ラヴィリアは、窓枠から身を乗り出すのはやめたが、今度は窓枠に腰を下ろして、中庭の二人に叫び続ける。

「ずるい！ ずるい！」

「そんな事言われても……だってラヴィは、男の人に会っちゃいけない決まりがあるじゃないか！」

「そうよ、外には男の人がたくさんいるのよ」

キールクラインとクローディアは、窓辺のラヴィリアに答えた。

「……そうだけど」

ラヴィリアは先ほどまで声を張り上げていた口を今度は尖らせ顔をうつむく。

ラヴィリアは巫女王になる修業のため、決められた男子以外と接見することを禁止されている。外出する際も馬車から外を覗くことさえ許されない。遊び盛りの子供には大変酷なことだった。

ラヴィリアは、自分の立場を子供ながらも十分理解していた。だがたまにこうして自分を抑えられ

ず癩癩を起こす。まだまだ子供なのだ。

「いいなあ。キールとクローディアお姉ちゃんは！ わ、私はいつも……お城の中でお留守番……」  
ラヴィリアは自分の膝を抱いて、スカートの裾に顔をうずめる。涙がこぼれ落ちそうなのを必死に我慢しているのか声が震える。

「……ごめんね、ラヴィ」

クローディアは、こういう時のラヴィリアをどう扱っていいのかわからなかった。クローディアはラヴィリアに謝罪の言葉を述べるしかなかった。

「ねえ、ラヴィ！」

キールは王城の窓辺にいるラヴィリアに大きな声で語りかける。

「なーに」

ラヴィリアは、スカートから顔を上げるとキールクラインを見下ろした。

「今日はお土産を買ってくるから、それを楽しみに待っていてよ、ねっ、お願いだよ！」

キールクラインはラヴィリアにそう懇願した。

「本当に？」

「本当だよ！」

「じゃあ、指切りして約束してよ」

ラヴィリアは再び窓枠の上に立つとそう切り返した。

「いいよ！」

キールクラインはそう告げると魔術呪文を暗唱した。

暗唱が終わるとキールクラインの足は地面からゆっくりと浮き上がり、次の瞬間目にも止まらぬ速さでラヴィリアのいる窓辺まで飛翔していた。さすが賢者の家系の子供だけある。大人でも習得が難しいとされている飛翔魔術を易々と行使して見せた。

キールクラインはラヴィリアの横に音もなく降り立つと、ラヴィリアに右手の小指を差し出した。ラヴィリアもそれに応じ小指を絡める。二人の可愛い声が中庭にこだまする。

『指切りげんまん、嘘付いたら、針千本飲ます』

中庭に残されたクローディアは、そんな二人の事を微笑ましく見守っていた。ラヴィリアの事はキールクラインには敵わない。またラヴィリアも同じ、誰よりもキールクラインの事を知っている。

『指きった』

二人は言い終わると、指を勢いよく離した。

「じゃあラヴィ、行ってくるね！」

「いってらっしゃい」

ラヴィリアの表情には、笑顔までとはいかないが涙はもう浮かんでいなかった。

キールクラインは、窓枠を蹴ると地上に向け勢いよく飛び出した。

そして地上に降り立ち、クローディアに連れられ王城を出て行く。ラヴィリアはそんな二人の後ろ姿を見えなくなるまで見つめ続けた。

「いつてらっしゃい」

ラヴィリアは小さく手を振ると窓から廊下の床に降りた。そして、誰もいないその場所で一人呟く。

「ラヴィリアは二人のご無事をお祈りしています……」

\* \* \*

城外のお忍びから戻ったキールクラインとクローディアは、一目散にラヴィリアが待つ部屋に向かった。

「ラヴィくださいま！」

「くださいま」

「あ、キール、お姉ちゃんお帰りなさい」

部屋に入るとラヴィリアは一人静かに椅子に座り法術の教本を読んでいた。キールクラインはラヴィリアとは数時間しか離れていなかったはずなのに、ずいぶん長いこと離れていたような気がした。

それほど二人はいつも一緒なのだ。寝る時も食事も遊ぶのも、勉強の分野以外は全てが一緒で違いが

ない。

「キール、貴方がやりなさい」

クローディアはキールクラインの横に立つと、彼の脇腹を肘で突つついた。

「えっと、できるかな」

「貴方が選んだのでしょ、分からなかったら教えてあげるわよ」

キールクラインとクローディアはラヴィリアを仲間外れにして何やら内緒話をしている。ラヴィリアはそれがとても気になったようで、本をテーブルに置き立ち上がると、二人の傍に歩み寄った。

「もう、二人ともコソコソ何しているの？」

「な、なんでもないよ！」

何でもないと言うには、キールクラインの行動はラヴィリアの目にとっても怪しく見えただろう。いたずらを考えているときは、態度から悟られないよう飄々とすることを心がけている。今はそれとは違うが何かを隠しているということに悟られている気がする。

「嘘ね」

ラヴィリアにはキールクラインにきつぱりと伝える。

「ラヴィには全部お見通しね」

クローディアはクツクツと忍び笑いをしていた。

「お姉ちゃんはちょっと黙っていてよ」

「はいはー」



キールクラインはそんな姉を一回睨みつけてから、咳払いを一つした。そして……

「ラヴィ、ちよつとの間だけ目をつぶっていてくれる？」

そう願う出る。

「えっ、なんで？」

「いいからお願ひ！」

ラヴィリアは不審に思ったようだが、キールクラインに言われるがまま両目を閉じた。

「これでいいの？」

キールクラインは、ラヴィリアがきちんと目をつぶっているか確認するため、ラヴィリア顔の前で手を振った。大丈夫のようだ。

それからラヴィリアの背後に立つと、ラヴィリアの首筋にそつと手を回した。

「くすぐりたいよ！ 何やっているの？」

ラヴィリアは突然首筋を触られたので、首に鳥肌が立った。

「まだ目を開けちゃ駄目だよ。ちよつと我慢してね」

「う、うん……」

ラヴィリアは、口をへの字にしてくすぐりたいのを我慢している。

キールクラインはあまりラヴィリアの肌に触らないようにして、髪を首元から退かすと懐にしまっていた物を取り出し、ラヴィリアの首にかけた。

「えっ、これをこうして……お姉ちゃん、これでいいの？」

キールクラインはクローディアに助けを求めた。クローディアは傍に寄ると、ラヴィリアの首筋を  
確認する。

「ええ大丈夫。上手く出来ているわ」

キールクラインはクローディアの言葉を受けラヴィリアの前に移動する。

「よし！ ラヴィ目を開けていいよ」

「もういいの？ 開けるからね！」

ラヴィリアは、恐る恐る目を開けた。最初に目に飛び込んで来たのは、キールクラインの得意げに  
歯を見せて笑う姿とその後ろで同じく優しく微笑んでいるクローディアの姿だった。

「約束のお土産だよ！」

「お土産？」

キールクラインはラヴィリアの胸元を指刺した。ラヴィリアは自分の胸元に目をやるとキラキラ輝  
く十字型があるのに気が付いた。

「わあ、綺麗！」

それは水晶で出来た十字型のタリスマンだった。ラヴィリアはそれを指先で摘まんで掌に置いた。

「キールが選んだのよね」

「なかなかセンスいいだろう？」

キールクラインは得意げに腕組みをして体をのけぞらせる。

ラヴィリアとの約束を守り土産を買ってきたのだ。

「キール、お姉ちゃん大好き！」

ラヴィリアは二人に飛びついた。体全体を使って感謝の気持ちを伝えた。しかし飛び掛られた方はたまったものじゃない。キールラインとクローディアはラヴィリアをなんとか抱き止める。

「もうラヴィ危ないよ」

「少しお転婆がすぎるわ」

「お姉ちゃんほどじゃないもん」

「言ったわねえ」

ラヴィリアは立ち上がるとクローディアから逃げる。

「こら待ちなさい」

「いやだも〜ん」

このタリスマンはお忍びの最中、露店で売られていたのを偶然見つけたものだった。キールクラインは一目で気に入り、これをラヴィリアのお土産にしようと思った。クローディアは女の子のお土産ならもつと可愛い物が良いのではと言ったが、彼のインスピレーションがこれだと言うのだ。なぜこれが良いのかをクローディアに力説してみた。案の定ラヴィリアは、そのタリスマンを見て本当に嬉しそうに微笑んだ。大当たりだ。

「キールありがとう。ずっと大切にするね」

「どういたしまして」

室内ではクローディアとラヴィリア、姉と妹が笑い声を上げながら追いかけっこを繰り返している。

なんて幸せな光景だろうか。

キールクラインは、この空間を切り取って自分の中にしまっておきたいと思った。

\* \* \*

「ふふふ〜ん♪」

キールクラインは馬車の荷台に寝っ転がって、鼻歌を歌っていた。

今日は久しぶりに幼い頃の夢を見て気分が良かった。小さな箱庭のような幼き日の思い出。

——あんな夢を見るのも……あれのせいかな。

キールクラインは、起き上がると遠くに視線を合わせた。キールクラインの目には、空と地を分断するかのよう、横に伸びる壁がしっかり見えた。そこに昇ったばかりの太陽が顔を出す。太陽の先にあるのがティシヤナ国聖王都の巨大な城壁だった。

「久しぶりに戻って来たな」

懐かしき我が故郷。

キールクラインは賢者の修行のため長く故郷を空けていた。通常の賢者の修行ならば国内だけでも事足りるが、彼が目指さなければいけないのは、国一と謳われる賢者の王の器だ。

「おじちゃん、俺ここで降りるわ」

キールクラインは、馬車の持ち主に声をかけた。

「えつ、ティシヤナに行かれるのでしょ賢者様」

「まあね」

「では、城門の中までお乗せしますよ」

「いや、ここで十分だよ。……それに城門を潜る前にちよつと野暮用があつてね、それを済ませて来るよ」

キールクラインは自分の手持ちの荷物をまとめ出した。

「そうですか」

「道中乗せてくれてありがとう。とつても助かったよ」

キールクラインは、馬車の持ち主に丁寧に礼を言い、ひよこつと頭を下げた。

「いえいえ、こちらこそ賢者様に乗って頂いたおかげで、野盗に襲われる心配もなく安心して旅が出来ましたよ。お礼を申し上げたいのはこちらの方ですぜ」

「そう言ってもらえると嬉しいな。じゃあ、おじちゃんも達者でね」

キールクラインは、そう言うつと魔術を暗唱した。

「ええ、賢者様も」

キールクラインは、馬車の主人に手を振りながら空中に舞い上がった。そして空高くに留まると、しばらくの間馬車が城門向かって進み、小さくなってゆくのを見送った。

上空は地上とは違つて風が強かった。キールクラインの独特の癖のあるオリブ色の髪が風になび

く。

「このまま馬車に乗って城門を潜ったら、俺が帰って来たことが国中に分かっちゃうからね、慎重に  
いかないと」

キールクラインはそう言い、肩にかけていた荷物の中からなにやら一枚の布を取り出した。それは  
濃いグリーン色のビロード生地のマントだった。

キールクラインはそれを風に逆らいながら身に纏う。このマントは世間では『賢者のマント』とも  
呼ばれている。賢者の資格を持つ者に必ず与えられ、その身分を証明するものであった。

マントは風を受けて、まるで旗のようになびいている。

「さてと、巫女の修道院は、どっちの方角だっけ……」

キールクラインは、さらに空高く昇るとティシヤナの聖王都を見下ろした。

「あそこだな」

キールクラインは、場所の狙いを定めると今度は上空から急降下する。重力と飛翔魔術が合わさり、  
まるで猛禽類が獲物を捕らえるようなスピードで空を駆ける。

ティシヤナ最大の修道院は、王都内にあるが中心部から少し外れた位置にある。建物は多くの木々  
の中に収まるようにして建っている。キールクラインは敷地内に音もなく降り立つ。

「こんにちは……かな？ 御免くださいと言うのもおかしいし……」

一人ブツブツと独り言を言いながら、修道院の入り口のアーチを潜った。旅に出てからどうも独り  
言が多くなって困る。院の敷地内に踏み入ると、上空から見た以上に中は草木が鬱蒼としており、ま

るでここは小さな森のようだ。アーチを潜ってからかなりの距離を歩いたが、誰にも出会う心配がない。

「……これは参ったな、誰か係の人とかいないのか。すみません！ 誰かいませんか！」

キールクラインは訪問を知らせるべく声を上げる。

「何者だ！」

その声は背後から唐突に投げかけられた。慌てて振り向くとそこには敷地の警備をしているらしき女性達が立っていた。彼女らは女性であるが、体格もよく男性と同じような装備を身に着け、キールクラインに向かってその装備を構えていた。

「待ってください！ 怪しい者ではありません！」

キールクラインは両手を上げて、こちらは抵抗しない旨を女性達に示す。

「……賢者か」

女性達はキールクラインのマントを見て、怪しい者ではないと分かったのか、手に持っていた装備を下ろしてくれた。キールクラインはそれを見て自分の手を下げる。

「賢者がこの地に何用だ！ ここは男子禁制の地と心得ていないのか！」

「ええ、それは承知しています。実は面会したい人物がいます……」

「面会希望か……面会用の入り口は別だぞ」

「すみません、不慣れなもので」

キールクラインは警備の女性達に謝罪した。

「皆さんのお手を煩わせてしまいました。実はこちらに居るか分からない子なので、どこに行けば確認出来るでしょうか？」

「誰に用だ」

「えっ？」

警備の女性の一人が、懐から何やら書類を取り出した。

「調べてあげるよ」

彼女はこの修道院に滞在している巫女のリストか何かを持っているようだ。これは助かった。

「ありがとうございます！ 実は俺、ラヴィリアという巫女に会いに来たんです！」

キールクラインが会おうとしているラヴィリアというのは、幼き日兄妹のように育てられた『ラヴィ』の事だ。ラヴィリアは自分と同じく修行をするため、王城を出て修道院に身を置いているはずだ。

はずだ、などと不確か言葉を使うには理由がある。彼女とはティシヤナを旅立ってから一度も連絡を取れずにいた。そのため正確な所在を知らない。しかし全く手がかりがないわけではなかった。旅立つ前『私は国で一番大きな修道院に行くの』とラヴィリアから聞かされていた。そしてここがその国で一番大きな修道院だ。

「ラヴィリアという名の巫女か……」

女性は数秒リストに目を落とす。そして再びキールクラインの方に向いた。

「残念だが、ラヴィリアという名の巫女はここにはいないぞ」

「えっ、そうですか……参ったな」



「他の修道院の間違いではないか？」

キールクラインはこの修道院だと思っていたが、どうやら間違えたのだろうか。国内でこの規模の修道院は他にはないはずだ。もしかしたらラヴィリアの勘違いかもしれない。しかしそうになると、本当に当てがなくなってしまう。

——仕方がない。

「あの、どなたかラヴィリア・フォン・ファイファアの所在をご存じの方はいませんか？」

リストに名前がなくても、ラヴィリアはファイファア家の息女だ。誰か所在を知っているかもしれない。ラヴィリアのフルネームを出すのは極力避けたいと思っていた。しかしこの場は情報を仕入れるために致し方ない。しかしその判断は失敗だったことを思い知る。

キールクラインの周りにいた警備の女性達が全員キールクラインを凝視し始めた。

「……まさか賢者よ。貴様は巫女姫様に会いに来たというのか？」

どうやらラヴィは『巫女姫』と呼ばれているようだ。確かに巫女王になる前の身だから『姫』という表現は正しいのかもしれないとキールクラインはぼんやり思った。

「ええ」

キールクラインは、至極当然のようにならずいてみせた。

「なんだと！ 恐れ多くも巫女姫様に面会を願ひ出ようとしていたのか！」

「……あっ」

——これは不味い。

やはりラヴィのフルネームを出したのが間違いだったか。キールクラインは、場の空気が不穏になったので、この場は一度引いて出直してこようと思った。しかし、時すでに遅く……

「巫女姫様に面会など怪しい！ その身柄取り押さえる！」

「えっ、いきなりそう来るの？」

キールクラインは一瞬の判断を誤り、周囲を女性達に取り囲まれてしまった。さすが訓練されている女性兵と褒めたくなるような動きだ。

なんてことを考えていい状況ではない。ティシヤナに戻っていきなり、捕縛されて牢にでも入つたら……

——絶対、各地から怒られる！

特にロイト家の父と賢王、そして某王女辺りからこっ酷く……

キールクラインは自分の姿を想像して青ざめた。ここは何としても逃げなければいけない。

「す、すいません、ちよつとだけ俺の話聞いてくれませんか！」

「問答無用！」

訴えかけてみたが、無駄であった。

キールクラインは、とりあえずこの場から逃げるため、来たときと同じように飛翔魔術を発動させ女性達の包囲から逃げることにした。

素直に拘束されると見せかけて、数メートル上空に飛んだ。しかし周囲の木々に邪魔をされ、急上昇できない。また相手も対賢者戦を熟知しているらしく、こちらの弱点を突いてくる。

「相手は賢者だ！ 魔術に注意しろ！ 法術が使える者を呼べ！」

警備の女性達も本気らしい。巫女が使う法術を使われたらこちらも無事に逃げるのは難しい。「そっちに行かせるな！」

キールクラインは飛翔しながら、勝手の分からぬ修道院の庭を逃げる。そしてなんとか女性兵達を撒いたと思つたところで広い空間に飛び出た。どうやらここは修道院の中庭らしい。

城の中庭のように、人の手によって手入れされた美しい庭園がそこにはあつた。

しかし、今はその美しい風景には、不釣り合いなモノが見える。気がつくど修道院の中庭には、武器を持った女性警備兵と手に杖を持った巫女達が勢ぞろいでキールクラインを出迎えてくれているではないか。

「あーあ、どうしよう……！」

どうやら、キールクラインは誘導にまんまとはまってしまったようだ。

\* \* \*

ラヴィリアは自室のベッドに夜着姿のまま寝そべっていた。

別にどこが悪いわけではないのだが、今日は調子が悪いと言つて巫女の修業をずる休みしてしまつた。

ラヴィリアにとっていま行っている巫女の修業は、とても単調でつまらないものだった。どちらかと言えば、棒術など体を鍛える訓練の方が気に入っていた。それは戦うためではなく体力作りのための訓練だ。神託を降ろす巫女には健康な身体と、長丁場にも耐えうる体力が必要とされた。

窓の外は少し風が強いようだがとても良い天気だ。時折窓がカタカタと揺れる。ガラス越しに差し込む陽射しは、室内に丁度良い陽だまりを作ってくれる。ラヴィリアは外を駆け回る自分を想像しながら、ベッドの上でまどろんでいた。その時だった……

部屋に女性達の騒ぐ声が響いた。

「なっ、何？」

眠りに落ちかけていたラヴィリアは、突然の騒ぎ声に起こされた。自分の心臓がドキドキと脈打っているのがわかる。寝ぼけ眼で周囲を見回した。しかし部屋はいつもの通りだ。どうやらその騒ぎ声は、窓の外の中庭から聞こえて来るようだ。

——外から？

ラヴィリアはベッドから起き上がると、床の上に降り立った。そして床に着くほど長く伸びた自分の髪を掴み肩に掛けると室内を進む。この部屋には中庭側にバルコニーがある。そこから中庭の様子を見ようと思ったのだ。

ラヴィリアはこの修道院の最高責任者だった。事件が起きた場合赴かなくてはならない。眠い目を擦りながら窓に手を掛け、少し乱暴に開け放った。

「もう、うるさいなあ」

バルコニーを裸足で歩くと、中庭を見下ろした。庭の中央に警備の女性や巫女達が武器を手に集結している、騒ぎの原因はこれのようだ。どうやら誰かを包囲している。人垣の間から最初にグリーンのマントが目に入った。距離があつたが骨格から男性なのがわかる。侵入者は男性の賢者のようだ。

——賢者？

ラヴィリアはその侵入者に違和感を覚えた。賢者ならばここがどういふ場所か知っているはずだ。誤って迷い込んだのだろうか。もしわざとならばこれは何かあると思った。

ラヴィリアは手すりから身を乗り出して目を凝らした。

包囲する人々を巧みに避けている人は、賢者のマントを身に着けたオリーブ色の髪をした青年だった。恐らくラヴィリアと同年代ぐらいだろう。

「……えっ」

ラヴィリアは生まれてこのかた、両手で数えられるぐらいの男性にしか会ったことがない。修行の一貫として男性との接見が制限されていた。許可が下りているのはほとんどが王族と親族だ。遠目で見ることもあるが、この修道院に入ってからには、それも皆無に等しかった。

ラヴィリアは彼の姿を目にした途端、胸がざわついた。眼下の賢者に見覚えがあつたからだ。この感情をなんと言つたらいいのだろうか。そうだ『懐かしい』だ。

ラヴィリアは自分の胸元に手を置いた。そこには銀の鎖に通された十字型のタリスマンがあつた。

「キールなの？」

ラヴィリアは幼い日、兄妹のように育つたキールクラインの愛称を口ずさんだ。

「……私が、間違えるはずがないわ、あれはキールよ！ 絶対キールよ！」

ラヴィリアは自分に言い聞かせるように声を出す。気づくと自分は手が震えているではないか。タリスマンを両手で握りしめ乱れる心を懸命に鎮めようとするが、上手くない。不測の事態に対応出来るよう日々精神の鍛錬を積んできたというのに、なんと不甲斐ないのだろうか。いや今ここで自分が捨て鉢になってはいけない。ラヴィリアは息を一つ大きく吸って吐きだすと、呼吸を整えた。

——私はどうすれば……そうだ！

ラヴィリアはようやく自分が取るべき行動を見定めた。まずキールクラインの元に向かおう。そして取り囲む女性達の誤解を解かなければ。今それが出来るのは自分しかない。しかしその考えは再び暗礁に乗り上げる。このバルコニーからは中庭に降りる階段はない。部屋から中庭に出るにはとても遠回りで時間がかかる。

「もっ！」

警備の事情とはいえ、このベランダが憎らしい。

そうこうしているうちにキールクラインが捕まってしまう。頭の固い彼女たちの事だ、キールクラインが拘束されたら容易に面会をさせてくれるわけではない。解決策が思いつかない。

——どうしたら。

ラヴィリアは、中庭のキールクラインをじっと見つめた。この状況何か昔にもあったような気がする。あの時は王城にてキールクラインの横にはクローディア王女がいた。幼い時分の行動を思い出す。それは妙齢な女性がするには少々恥ずかしい。しかし——

「これしかないか……」

ラヴィリアは両手でバルコニーの手すりを掴み、体内を反らせるほど大量に大気を吸い込むと、吐き出すと同時に叫んだ。

息が続く限り、力の限りキールクラインに気付いてほしいとその名を叫んだ。

「キールクライン！」

——風の精霊よ、どうか私の声を彼に届けておくれ。

心の中で祈るのだった。

\* \* \*

キールクラインは、誰かに名前を呼ばれたような気がしたので周りを見回した。しかし周囲の警備兵や巫女達の装備のぶつかる音が邪魔をして音が拾えない。

「気のせいかな？」

しかし。

「キール！ キール！」

やはり自分の事を呼ぶ声がある。キールクラインは、声が聞こえて来る方角をみた。そこには修道院の建物がある。ティシヤナ国内で自分の事を『キール』と呼ぶ人物は限られている。もしこの場所

で自分のことを『キール』と呼ぶ人物がいるとしたら……その可能性は一つしかない。

「ラヴィリア？ ラヴィイなのか！」

「キール！ こゝよ！」

キールはバルコニーに立つ人影に気が付いた。

「ラヴィイ！」

キールクラインは周囲の包囲を逃げながら、バルコニーに近づこうとした。しかしそれよりも早く、ラヴィリアらしき人影は、バルコニーの手すりの上に立ち、中庭に飛び降りようとしているではないか。

「まさか巫女姫様！」

「おやめください！」

キールクラインを取り囲んでいた女性達も巫女姫らしき人物に気が付いたのか、悲鳴が上がる。

しかしラヴィリアは、誰の制止の声も聞こえないかのように、バルコニーの手すりを両足で蹴って飛び降りた。

甲高い女性達の悲鳴が中庭を支配する。現実を直視出来ず、目を伏せる者もいる。しかしラヴィリアは地面に激突することもなく、まるで階段を一段降りたかのようなフォームで中庭の地面に着地する。ラヴィリアの体の周囲には魔術の光の粒が無数に舞っている。それが彼女を静かに地面に下ろしたのだ。

「巫女姫様！」



ラヴィリアは自分を心配する周囲の声や差し伸べられた手を払いのけ、中庭を走る。そして一直線にキールクラインの元へ走り、その勢いのまま腕の中に飛び込んだ。

「キールおかえりなさい！」

「ただいま、ラヴィ！」

キールクラインはよろめきながらもラヴィリアの身体を抱き止めた。そして、その体を抱き上げ自分を軸にしてグルグル回った。

「相変わらず無茶するなあ」

「キールの魔術があるから大丈夫よ」

ラヴィリアの身体にまとわれた光の粒が静かに散ってゆく。

そう、ラヴィリアを無事に地面に下ろした光はキールクラインが放った魔術だ。ラヴィリアはキールクラインの腕を信頼し地上に飛び降りたのだ。

——本当になんて無茶をしてくれる。

キールクラインは、ラヴィリアに信頼を置かれたのは嬉しかったが、肝が冷えた。

「修業の旅は終わったの？」

「まあね」

キールは両手が塞がっているので、顎を少し持ち上げ得意げなポーズをラヴィリアにしてみせる。

「おめでとー！」

ラヴィリアは再びキールに抱きついた。今度はキールの首に力一杯しがみついた。

「良かった。俺これでやっとラヴィとの約束を守れた」

ラヴィリアはキールから少し離れると顔を上げる。

「覚えていてくれたんだ？」

「もちろんだよ」

『約束』とは。キールクラインはラヴィリアと一つ約束をした。ラヴィリアは旅立ちの朝、涙を必死に堪えて笑顔でキールクラインを送り出してくれた。その姿を見て自然と口に出た言葉がある。それが『帰ってきたら、一番最初にラヴィに会いに行くから』だった。

「ありがとう」

ラヴィリアはお礼の言葉を紡ぐと、キールの両頬に手を置いて満面の笑みを落とす。

——ああ、良かった。やっと約束が守れた。

キールはラヴィリアの表情を見て長年抱えていた心のつかえが取れた気がした。あんな顔で別れたままでは寝覚めが悪い。

ラヴィリアは目を逸らさずキールを見つめる。

「キール、かっこよくなつたね」

思いもしない感想だった。

「そう？」

「見違えた、背も私より高いでしょ？」

たしかに顔は子供の頃と違い余分な肉が削ぎ落ちたと思うし、体も鍛えられラヴィリアの身体を

軽々持ちあげられるほどになっている。四年前二人の身長はそんなに変わらなかった。今はどれくらい差がついたのだろうか。

「それはどうもありがとう。ラヴィこそ少しは女らしく……そんなことないか？」

ラヴィリアは、キールクラインの頬に優しく置いていた指先に力を入れると、今度はむんぎゅと摘まんで捻った。

「何よそれ、失礼ね！」

「いたたいたたい、冗談だよ。綺麗になってどうしようかと思いました」

キールは、怒れるラヴィリアを地面に下ろしながら感想を訂正する。

お互いの背は頭一つ違う。ラヴィリアはキールの顔を覗き込んで、当たり前ですと言いたげに見上げてくる。

「初めからそう言いなさいよ！」

二人はお互いの顔を見合わせて笑う。

一方キールを取り囲んでいた警備の女性と巫女達は、自分たちの巫女姫が突然バルコニーから飛び降りて、見知らぬ賢者に抱きつき楽しそうに談笑しているのを呆然と見ていた。しかし数名が我に返るとラヴィリアに駆け寄った。

「巫女姫様！ お怪我はありませんか！」

「えっ、ええ。見ての通り無事ですけれど」

ラヴィリアは回りにいたギャラリーのことなど、すっかり忘れていたようだ。

「巫女姫様、どうかこのような輩からお離れください！」

「巫女姫様に触れるとは、なんたることを！」

「その罪極刑に値します」

職務を思い出した警備兵や巫女は、次々にラヴィリアに懇願した。

そして彼女たちは装備を構え直し、再びキールクラインを包囲しようとしているのではないか。

「おやめなさい！」

ラヴィリアは、彼女達に向かって一喝して退かした。そしてラヴィリアは再びキールの方を見た。いったい何がどうなってこんな事態になったのだと、目が語っている。

「ちよつと食い違いがあつて……」

キールクラインは、そういうとラヴィリアに事の顛末を説明した。

そうであつた。ここにいるラヴィリア以外キールクラインの素性を知る者はいない。このままではキールクラインは修道院侵入の罪と、ラヴィリアの掟を破つた罪で投獄されてしまう。

ラヴィリアは話を聞き終わると、何の前触れもなくキールクラインの足元に片膝をついて跪いた。

キールクラインはラヴィリアの行動に身体が対応出来ず、動きを止める。

「キールクライン様、この不始末は修道院の主である私めの責任でございます。数々の御無礼をお許してください」

ラヴィリアは、今までとは別人のような喋り方を始めた。

「巫女姫様！」

警備の女性と巫女達は、巫女姫の突然の行動に驚愕する。それもそうだ。キールクラインの今の外見はお世辞にも綺麗とは言えず小汚く見窄らしい、おまけに若輩。いくら賢者とはいえそんな相手に修道院の最高責任者である巫女姫が膝を折るなど一大事である。

「皆さん、こちらはロイト家のご子息キールクライン・フォン・ロイト様です。キールクライン様は、次期賢王の地位を得るべく修業の旅よりご帰還なさいました。何をしていますのですか、お控えなさい！」

ラヴィリアは跪いたまま、女性達に向かって高々に声を張り上げた。ラヴィリアの言葉を合図にしたかのように、その場にいた全員が一斉に跪いた。

「も、申し訳ございません」

「ご無礼をお許してください！」

警備の女性と巫女達は、自分達の仕出かした失態に青くなっていた。キールクラインはとうとうこの事態に順応出来ずにいた。鳩が豆鉄砲食らったとは、まさにこのような顔を言うのだろう。光景を茫然と見ていた。

「えつ、えつと……」

ずっと旅の空の下の暮らしたので、こういう場面に身を置くのは久しぶりだった。そのため、口がスムーズに動かない。ラヴィリアはそんなキールクラインの状態に気がついたのか、そっとマントを引つ張った。どうやら話の流れを合わせてくれという合図だろう。

キールクラインは、逃げ出した気分だったが、ラヴィリアの手前そういう訳にはいかない。そし

て自分の中で、精一杯着飾った声音を絞り出す。

「ラヴィリア殿、どうか頭を上げてください。この度の事は、私自らが招いたこと、どうかお気になさらないでください」

そう言うときールクラインは、自分の前に跪くラヴィリアの手を取って立ち上がらせた。

「私達は幼き日、兄妹のように育てられた仲ではないですか、どうかそのようなお気遣いは無用に願います」

「ありがとうございます。皆さん、キールクライン様のお許しが出ました。今後こういうことがないように！ さあ、持ち場に戻りなさい」

「はい！」

その場にいた女性達はラヴィリアの言葉に従い、立ち上がると二人に深々と挨拶をしてから各々の持ち場へと帰って行った。しばらくピリツと張りつめた空気の余韻が中庭を覆う。その雰囲気は堪り兼ねて、最初に声を発したのはキールクラインだった。

「はあっ、こういう言い回し久しぶりだよ。声、震えていなかった？」

キールクラインはラヴィリアの手を離し、自分の両腕を摩りだした。少しの間の出来事だったが、両手に汗をかくほど緊張していた。

「上手く出来たと思うけど、これから増えるから少しは慣れておかないとね」

ラヴィリアはこれしきの事で根を上げているキールクラインに先輩風を吹かせている。

「……だよ。努力します」

「ラヴィ様！ この騒ぎは何事ですか！」

そんな時であった。二人の背後からラヴィリアの名を呼ぶ。年配の女性らしき声が聞こえてきた。見ると中年の女性が修道院の建物から出て、こちらに歩み寄ってきているところだった。

「マーシャ、あのね！」

ラヴィリアはその女性の姿を見るなり『マーシャ』と呼んで彼女の元へ歩み寄った。キールクラインもラヴィリアの後ろに続く。

マーシャは二人の元までゆっくり歩いてくると、ラヴィリアを見た後キールクラインの方をじっと見つめた。

「ラヴィ様、まさか……こ、こちらの方は」

「そうマーシャが今思っていることで正解よ」

ラヴィリアはマーシャの背後に回り込み、マーシャをキールクラインの前に押し出した。

「キール様……キール坊ちゃまなのですか？」

「うん、マーシャ。ただいま帰りました」

キールクラインは自分より小柄な女性を見下ろして、にっこりと微笑んだ。マーシャは返事を聞く大きく目を見開いた。

「よく、無事で……」

そう言うのと両手で顔を覆う。どうやら感極まって涙を流しているようだ。キールクラインはそんなマーシャの肩を抱きしめた。

このマーシャという女性は、キールクラインとラヴィリアの乳母であった。貴族の子息は必ず乳母が付いた。その女性が母親代わりとなって身の回りの世話や礼儀作法を教える。言わばマーシャはキールクラインにとって育ての母だ。

昔のマーシャは、優しいが怒ると怖かった。よくいたずらを見つかりラヴィリアと二人で怒られたものだ。彼女は幼き日のキールクラインにとって絶対の存在だった。

しかし今のマーシャは、自分の腕の中にすっぽり納まってしまふほど小さく、守らなければいけないさえ湧き起こってくる。それは自分が成長したからなのか、それともマーシャが年を取ったからなのか、キールクラインは時間の経過を感じずにはいられなかった。

「キール様、こんなに立派になられてマーシャは、嬉しゅうございます」

「マーシャは、ラヴィと一緒に修道院に来ていたんだね。ラヴィの次に会えて嬉しいよ」

「……まさかキール様、ラヴィ様とのお約束通り最初にこちらへ？」

「うん、そうだよ。さつき国境を越えたばかり」

どうやらマーシャは、ラヴィリアとキールクラインの約束を知っていたらしい。

「もう、お約束とはえ、王様やお父上様の元より先に来られるなんて……」

「俺は約束を守る男だからね。しかしこの約束、ちよつと難易度高くて……」

キールクラインはラヴィリアの方を見ると苦笑いをした。

「ではこの騒ぎは、キール様のせいなのですね！」

先ほどまで泣き顔だったマーシャは、眉をついと上げてキールクラインを睨みつけている。



「俺が至らぬばかりに……」

「昔から言っています、ご自分の立場をちゃんと弁えてください！」  
キールクラインは久しぶりにマーシヤに怒鳴られた。

「ごめんなさい、お騒がせしました！」

しかし、それもなぜか心地良い子守唄のように感じられた。キールクラインは、怒られながらもつい顔が笑ってしまう。

「ラヴィ様もラヴィ様です！」

「えっ、私も？」

ラヴィリアは突然自分の名前を呼ばれ驚く。怒られるのはキールクラインであって、まさか自分にお説教の矛先を向けられるとは思ってもいなかった。

「その格好はなんですか！」

ラヴィリアはマーシヤに言われ自分の体に視線を落とした。

「あっ」

すっかり忘れていた。ラヴィリアは夜着姿のまま部屋を飛び出していた。

「今すぐお着替えてください。キール様とお話になるのはそれからです！」

「は、はい！」

ラヴィリアは、マーシヤの言付けにとっても良い返事をした。

「さっ、キール様は私と一緒にお越しください！」

「マーシャ、キールは私の部屋に連れてきてよね！ 絶対よ！」

「承知しておりますよ」

ラヴィリアは、自分の夜着の裾と自分の長い髪を持ち上げると、建物に向かって小走りに向かう。

ラヴィリアは、途中一度二人を振り返ると修道院の建物中に姿を消した。

「幾つになってもお転婆で困らされますわ」

「いいじゃない。ラヴィらしくて」

「キール様！」

マーシャの、キールクラインを諷める声上がる。

「怖い怖い」

本当はもう全然怖くないのだが、今は昔を懐かしんで怒られたフリをする。

\* \* \*

今日は本当に良い天気だ。空には雲が一つもない。朝から吹いていた風が空に浮かぶ雲を全て吹き飛ばしてしまったのだろうか。

ラヴィリアは、修道院の衣裳部屋で部屋付きの侍女達に囲まれて身支度を整えている。表情一つ変えないで、巫女達に身を任せていた。服装は決して派手な装飾はない。だが修道院の主にあつたらしい

物だった。ローブは薄手で柔らかい絹地が幾重にも折り重ねられ作られている。そして長い髪はきちんと結び上げられている。彼女の髪は、これも倅により修行中は缺を入れることが許されない。その頭上には王族たちも好んで使うプラチナで作られたサークレットと、揃いの髪止めが輝いている。その姿はまるで絵画の中から出て来たかと思うほど麗しかった。そこにはお転婆なラヴィリアの姿はなく、一人の聡明な巫女姫が佇んでいた。

しかし、そのラヴィリアの装いに一つだけ不釣り合いな物が存在した。それは胸元に光る水晶のタリスマンだった。そのタリスマンは光の反射も鈍く、玩具のようなペンダントだった。周囲は服装に合う装飾を付けるよう懇願した。しかし、ラヴィリアはその願いに応じず水晶のタリスマンを付け続けている。巫女姫とも言われる人がどうしてこんな玩具に執着するのか理解できなかった。いや理解しようとしなかった。ラヴィリアはそんな相手には、何も語らず人形のように口を閉ざすのだ。

「巫女姫様、準備が整いました」

ラヴィリアは侍女の声にはたと我に返った。そして。

「ありがとうございます、もう下がってください」

ラヴィリアは、侍女達に優しく微笑むと下がるように言い渡す。

「失礼いたします」

侍女達はラヴィリアに恭しく礼をしてから、静かに部屋から去っていった。ラヴィリアは侍女達が完全に去ったのを確認すると、衣装部屋から廊下へと続く扉に飛びついた。そして扉を開け放ち、廊下の外を見回し確認する。

——もう誰もいない。

「よし！」

ラヴィリアは、今しがた綺麗に着せてもらったばかりのローブの裾を片手でまとめて持つと、廊下を勢よく走り抜けた。聡明な巫女姫はどこかに飛んでいってしまった。

\* \* \*

キールクラインはマーシャに案内された部屋で優雅にお茶を飲んでいた。広い部屋の中央に丸いテーブルセットがあり、マーシャが傍らでお茶をついでくれる。お茶菓子として皿の上にマフィンが並んでいる。

「お待ちせ！」

ラヴィリアがその部屋に飛び込んできたのは、キールクラインが二杯目のお茶を入れてもらっている時だった。

「やあラヴィ、着替え終わったみたいだね」

「うん！」

キールクラインは、ラヴィリアの姿を見るとにこやかに微笑んだ。しかし一緒にいたマーシャの態度は正反対だった。

「ラヴィ様！ またなんてはしたくない！」

マーシヤは、ラヴィリアがローブの裾をたくし上げて持っているのを見逃さなかった。

「あっ！」

ラヴィリアは慌ててローブの裾から手を離すと、両手の平で服装を整えた。

「あれほど何度も申しあげているではないですか！ ご自分がいつまでも子供だと思っ  
ていてはいけません。世間ではラヴィ様の年齢でしたら……」

「ごめんなさい。今度から気を付けます」

ラヴィリアは、マーシヤに怒られ下を向いたまま頬を膨らませた。そして子供のように上目使いでマーシヤに見上げた。

「そのお言葉は最近も聞きましたよ。ラヴィ様の『今度から』はいつになるのでしょうか？」

ラヴィリアは自分の両耳を手の平で覆いたかった。しかしそんな事したらマーシヤのお説教は、さらにパワーを増す。ここは素直に従うのが一番早い。

「ねえ、マーシヤ」

しかし、キールクラインが二人のやり取りに割り込んできた。

「なんですかキール様。少しお待ちください」

「このマフィン、マーシヤの手作りだよね。子供の頃よく作ってくれたよね？ 懐かしいな」

キールクラインはお茶菓子のマフィンを一つ手に取り、頬張っていた。

「あらキール様、覚えていてくださったのですか？」

「そりゃ、俺にとってマーシャの手料理は、お袋の味だからね」

「嬉しいことを言ってくださいませ」

機嫌を良くしたマーシャは、ラヴィリアのお説教から話が外れ、マフィンの話題に乗ってきた。キールクラインはにっこりと笑うと、マーシャに気づかれないようそっとラヴィリアに手でサインを送る。ラヴィリアはそれに気がついたらしく、静かに部屋の中を移動すると、キールクラインの向かいの席に腰を下ろす。

「この隠し味なんだっけ、昔聞いた覚えがあるんだけど……どうしても思い出せないんだよね」

「あら、これはですね」

マーシャは、上機嫌でマフィンのレシピを説明している。どうやらマーシャの誘導に成功したようだ。キールクラインが帰ってきたばかりという事も成功の要因だろう。

ラヴィリアにとってマーシャは、この修道院の中で対等に話が出る数少ない存在だ。そのため、つい自分を見せて彼女を怒らせてしまう。マーシャもラヴィリアが自分に甘え慕ってくれるのが嬉しい反面、立場上ラヴィリアを厳しく諫める。それはマーシャの精一杯の愛なのは理解している。しかし、もう年端もいかない子供ではないのだから、お説教は勘弁してほしいのが本音だ。

「帰るときに幾つか包んでよ」

「分かりました。でも歩きながら食べてはいけませんよ」

「もう嫌だなあ。俺だっていつまでも子供じゃないんだよ」

「そうでしたね、ラヴィ様がいつまでも子供なので、ついキール様にも同じようなことを申し上げて

「しまいました」

「ラヴィはこのままが一番いいんだよ」

「ですが……」

ラヴィリアは何事もなかったようなすまし顔で、席に座っている。

「おほん、マーシヤ、今度は私がキールと話をする番よ」

ラヴィリアは、おもむろに立ち上がるとマーシヤが手に持っていたお茶のポットを取り上げ、テーブルの上に置く。

「あとは私がやりますから。ねっ」

「わかりました」

「マーシヤ、あとで寄るからね」

キールクラインは皿の上マフィンを指差した。

「ええ、包んでおきますよ」

マーシヤは、キールクラインにお辞儀をすると部屋から退出した。

「……上手くかわしただろう」

キールクラインは、両手を広げ首少し傾けてみせた。

「さすが！」

「マーシヤのお説教は昔から長いからね」

「よくいたずらが見つかって二人で怒られたよね」

「そうそう、主犯のクローディア姉ちゃんは逃げた後でさ。怒られるのは俺達二人だけなんだよな、懐かしいな」

実行犯のクローディア、作戦担当のキールクライン、見張り役のラヴィリア。それが子供の頃、いたずらをする時のフオーメーションだった。しかし実行犯の姉は、どうやっているのかお説教を逃れていた。

ラヴィリアは、キールクラインのいるテーブルに歩み寄ると、テーブルの上に並んでいるティーセツトとお菓子をお盆の上に乗せて持ち上げた。

「私の部屋に案内するわ」

「……やっぱり、どうもこの部屋はラヴィらしくないと思ったんだよ」

キールクラインが案内された部屋は、調度品が綺麗に整われており、いかにも来客用の部屋という装いだっただ。

ラヴィリアは、お盆を持ったまま部屋の奥へ歩いてゆくと、一つの扉の前で止まった。

「キール、ここを開けて」

お盆で両手が塞がっているラヴィリアは、キールクラインに扉を開けるよう命令する。

「はいはい」

キールクラインは椅子から立ち上がると、言われた扉を開けラヴィリアの後ろに続いて部屋に足を踏み入れる。

「お邪魔します」



「どうぞ」

通されたラヴィリアの部屋は、窓の多い部屋だった。

部屋の壁二面が大きな窓とバルコニーになっている。日の光が暖かく部屋の中を包み込む。部屋中央には大きめな天蓋付きのベッドがあり、全体的にラヴィリア好みの明るい色使いの部屋だった。

キールクラインは部屋に入ると床の上に転がっていたクッションを手繰り寄せその上に腰を下ろした。実はこの部屋、テーブルや椅子といった調度品がないのだ。ラヴィリアはお盆を床に置くと、キールクラインと同じく床の上にペタンとしやがみ込んだ。座るとわかるのだが、床の上にはラヴィリアの遊び道具らしきものが散乱していた。

「これぞラヴィリアの部屋って感じだな」

「そうかな」

本来ならばこの部屋の壁沿いに置かれている飾り棚に置かれるべき物でさえ、無造作に床の上に置かれている。部屋が散らかっているとも違う。床の上を中心に、ラヴィリアの世界が出来上がっているのだ。

そしてキールクラインが一番驚いたのは、宝玉が床の上に散乱していたことだ。宝玉は鶏の卵より少し小さい球体の寶石だ。色もさまざままでキールクラインは手近にあった一つを摘み上げると、光に透かして宝玉の中をのぞき込んだ。太陽の光を受けて不思議に光る宝玉。これは賢者や巫女にとって大切なものだ。この宝玉に魔力や法力を吹き込むと、杖に姿を変える。賢者や巫女は杖を使い、魔術や法術の力をコントロールし増幅させる。いわば媒体のような物だ。普段は持ち歩きが便利なようこ

のような球の形態をしているのだ。

「それ、好きなのをあげるわよ」

「えっ」

キールクラインは振り返ると、そこには今しがた服装を整えてもらったラヴィリアが、それを着崩し始める姿が目に入った。

「またマーシヤに怒られるぞ」

「その時はその時よ。この服と髪飾り重いんだから」

ラヴィリアは、綺麗に結び上げられていた髪を全部ほどくと、サークレットを髪止め代わりに額に戻して、キールクラインの横に寝っころがった。

「キール、知ってた？ 呪いの掛かった杖の方が宝玉になると綺麗なのよ」

「……ラヴィ、今なんて？」

「綺麗なのよ？」

「その前」

「呪いの掛かった杖？」

「呪い！」

キールクラインは、持っていた宝玉を慌てて離した。ラヴィリアはそんなキールクラインをポカンとした表情で見つめていた。そして火が付いたように笑い転げた。

「大丈夫よ。呪いと言っても杖の力を引きださなにかぎりただの棒よ。これがまた棒術用にとってこ

いの打撃力なのよね」

「棒術用にねえ……」

キールクラインは改めて、一つ一つの宝玉を品定めしはじめた。さすがティシヤナの巫女姫の私物だけある。宝玉から感じる力は、他国では国宝級クラスの物だ。実はこの宝玉のほとんどが他国で管理に手に負えなくなったものだった。宝玉を所有するには、大元の杖を納得させるだけの法力を必要とした。さらに呪いの掛かった杖となれば、ひねくれ具合は相当のものだろう。手に負えなくなった宝玉は、最終的にはティシヤナに持ち込まれ、修道院又は賢者の学院に献上される。この宝玉達はラヴィリアの法力を見込んで献上されたものなのだろう。キールクラインも国にいれば、献上されてゆく。

「あのね、これが毒の呪いでしょ、体が動かなくなる呪い、使った者を……」

ラヴィリアは、実に楽しそうに呪いの杖達を紹介してくれる。それはまるでペットか何かを紹介するようなフランクさだ。しかもこの光景には不釣り合いな怖い言葉付き。説明の最後に『どれがいい』と質問が飛んできて、キールクラインは思わず身を引いてしまった。

「ああああ、俺はこの体が動かなくなるのでいいよ」

キールクラインは、ラヴィリアが説明した中で一番呪いが軽そうな宝玉を指差した。

「それでいいの、まだ他にも……」

「い、いいよ！ 俺もそのうち嫌って言うほど献上されるだろうし」

「それもそうね」

キールクラインは、ラヴィリアの申し出を丁重にお断りしたところ納得してもらえたようだ。  
——セーフ。

こんな危険な物を幾つも持っていて、間違つて使つてしまったらと思うと怖くてたまらない。キールクラインは床の上から立ち上がると、譲り受けたばかりの宝玉に魔力を吹き込んでみた。すると宝玉は光を発しながら一振りの杖へと姿を変えた。普通の杖より金属の密度が高いようだが、羽根のよう軽い。一体どんな素材で出来ているのだろう。賢者としての探究心が触発される。

「お、軽い。ホントにこれなら棒術にはもってこいだ」

キールクラインは杖をさつと振つてみた。ヒュンと気持ち良く風の切れる音がした。  
「でしょ」

キールクラインは何度が杖を振つた後、また宝玉に姿を戻して鞆の中にしまった。

「ありがとう、もらつておくよ。ところでラヴィリアはまだ棒術習っているのか？」

「もちろん。私、結構強くなったわよ」

「じゃあ今度手合せ願おうかな」

「いいの？ 泣いても知らないわよ」

二人の楽しそうな声が部屋の中に響く。キールクラインは再び床の上に座ると寝転んだ。

「……ここはまるで時が止まっているみたいだな。子供時代に戻つたみたいだ」

心地の良い時間と懐かしい空気が、帰国前から張りつめていた気が緩む。

「……止まっているよ」

床の上で背中越しにラヴィリアが何か呟いた。

——いま、なんて言ったんだ？

その声は同じ室内にいるのに、何故か聞き取るのが困難であった。それはラヴィリアの声がいつもよりトーンが低かったからもある。

「ん？ ごめん聞き取れなかった」

「……いいの、何でもない。それより旅のお話をしてよ。ねっ！」

ラヴィリアそう言うとう自分は起き上がり、キールクラインを引きずり起こしにかかる。しかしキールクラインは、ラヴィリアの態度に何か不自然さを感じた。

「本当にいいの？ 何か俺に聞いて欲しい事があるなら……」

「いいの！」

強い口調で制された。

「ラヴィ？」

「……だって今日はキールが戻ってきて、私との約束を守ってくれたんだもん。こんな素敵な日はないじゃない。それに今日は一年分ぐらい笑ったわ」

そう言い放ったラヴィリアは、今日何度目の笑顔をキールクラインに向けてくれる。

どうやら気を回し過ぎたのだろうか。キールクラインはラヴィリアのリクエストに答えて、旅先での話を催促されるがままに披露した。和やかな二人の時間は、瞬く間に過ぎて行く。

\* \* \*

キールクラインは、ティシヤナの城下町を一人歩いていった。

一時間ほど前ラヴィリアのいる修道院を発ち、その足でティシヤナ王都の城下町に入った。ティシヤナは中立国のため、様々な国の要人たちが滞在している。そのため入国するには、城門で厳重な身元のチェックを受けなければならない。しかしキールクラインは賢者のマントを身に着けている。このマントは賢者のみが身に着ける事を許され、その地位を保証するものだ。それを巧みに利用し他の賢者達に紛れてティシヤナにこっそり入国した。

ティシヤナの城下町はたくさんのお賢者や巫女が往来し、他国とはまったく違った雰囲気を出している。キールクラインはティシヤナが特殊な町であったことに今更ながら気が付く。商店も魔術や法術の商品を扱う店が多く、すべてが豊かだ。歩道も美しく整備されており、町全体が一つの芸術作品のように思える。

キールクラインは、城下町のメインストリートへと足を進めると、ふとその歩みを止めた。その目に飛び込んできたのは、幼き日を過ごしたティシヤナの王城であった。

——ティシヤナ城……。

王城はティシヤナの中で一際美しく、日の光を受けて光り輝いている。キールクラインは、城を見上げると懐かしさがこみ上げてきた。しかし同時に胸を重く苦しめる。

「俺、あそこに戻るんだよな？」

キールクラインは、そのまま人の往来の激しいメインストリートに立ち尽くした。どれくらいそのままでいただろうか。瞬く間の一瞬、キールクラインはくるりと城に背を向けると、そのまま人混みの中に消えて行ってしまった。

\* \* \*

その女性は一人で酒場に来ていた。店の窓辺の席を陣取り、微動だにせず一人で窓の外を眺めている。よく見ると注文した酒にはほとんど手を付けていない。ようやく動き始めたかと思うと、持っていた小ぶりのポーチから懐中時計を取り出し、蓋を開けて時刻を確かめた。時計の針は、ちょうど昼時を指している。

女性は、懐中時計を元のポーチに納めると、代わりにコインを数枚取り出しテーブルの上に置いた。注文した酒の勘定だ。

「お勘定ここに置くわね」

女性は近くを通ったウェイターにそう告げると、席を立ち店の出入り口の方へ足を向けた。しかし、

出口の扉まであと少しというところで、女性の目の前に立ちふさがるモノが現れた。

「失礼、そこを通してくださらないかしら」

女性はすぐに自分の前に数人の人間が立ちふさがったのを理解した。そしてその者達に道を開けて欲しいと願ひ出た。しかし相手が悪い。女性の前に立ちほだかっているのは、昼間から酒場で飲んでいる者達だ。

酒場中が何かが起こりそうな気配に気づき、ざわつき始める

出口に立つその女性は、地味なワンピースを着ている。若い女性にしては、ずいぶん落ち着いた色の服だ。しかしその容姿は、地味な服装に反するほど美しかった。無造作にまとめられたルビー色の髪。意志の強そうなグリーンの瞳は自分の道を塞ぐ者達へまっすぐ向いている。凜とした気品を感じる。なぜこのような女性がこんな酒場に来ているのか不思議でならない。

「聞こえなかったようなのでもう一度言いますが、私はそこを通りたいの、だから通してくれないかしら。」

女性はその男達に怯える事もなく、一貫した態度で臨んでいる。声は男達に届いている。しかし彼らはさらに女性の周りを取り囲みココソコと内輪話をしている。

「やっぱりそうだよ」

「俺この前の式典で、クローディア王女を近くで見たんだよ」

「絶対そうだって」

男達は、おかしなことを口走っている。女性は男達の様子を黙って見ていたが、突然美しい唇の端



を上げて笑みを作った。

「あら、ばれていましたか。仕方がないですね」

女性はいとも簡単に男の言葉を肯定してしまった。そう彼女が、ティシヤナ王国の第一王位継承者クローディア王女である。

「王女様だって？」

「まさか！」

酒場にいた者たちが一斉にクローディア王女に視線を向けた。今まで事の成り行きを傍観していた客達が騒ぎ出す。

——ちっ、ここなら、誰も気がつかないと思ったのに。

クローディアは、心の中で愚痴る。

表情は完全な営業スマイルで、周囲の声に優雅に手を振って答えてはいるものの、その本心は、自分の素性をバラした男達に対して怒りで腹の中がふつつつと煮えたぎっていた。まさか一国の王女がそんな事を思っているとは露知らず、酒場中の酔っ払い達が一斉にクローディアに押し掛けてくる。

「まさか本物のクローディア王女様に会えるなんて感激です！」

「このようにどこにまでおいでになるなんて、庶民の暮らしを知るためにお忍びですか」

「何事も勉強ですので」

クローディアは、終始微笑みを絶やさず受け答える。

「姫様、俺たちと一緒に飲みましようよ」

「私、皆様と知り合えて本当に嬉しく思っています。しかしもう城に帰る時刻ですので……」

クローディアは、酔っ払い達の誘いを丁寧に辞退し、この場を治めようと思った。しかし、この時ばかりは場所と相手が悪かった。酔っ払い達はクローディアの話など聞いておらず、さらに距離を詰めてきた。

「そんなことを言わないで、姫様」

「ですが……」

クローディアが言葉を最後まで言い終わる前に、数人の男達がクローディアの腕をつかんだ。

「っ！ 何をなさいます」

流石のクローディアも一瞬だけ営業用のスマイルが解けた。しかしすぐに立て直すと、男達に捕まれた腕を振り払った。しかし、酔っ払い達は執拗にクローディアを自分たちの席に呼ぼうとクローディアの肩を掴み、その体を乱暴に引きずる。

クローディアは、多少の荒事は慣れているが、我慢も限界に来ていた。その美しい顔に怒りの表情が浮かべた。そして――

「皆様、いい加減になさいませ！」

クローディアは自分の立場と状況を踏まえて、怒りを抑えながらもその場の人々に一声を浴びせる。その凛とした声が、一瞬その場に居合わせた者の手を止める。しかし、それもほんの束の間であった。

「あちゃー、姫様に怒られちゃったよ」

「痺れる」

「記念になったな」

酔っ払い達は、クローディアから受けた一喝に思い思いに感想を述べる。ある者は手を叩いて喜び、ある者は羨望の眼差しを向ける。そして先程より輪をかけて、クローディアを誘いにかかりはじめる。クローディアの一喝は完全に逆効果だった。酔っ払い達を更に調子づける事になってしまった。

「もう、本当にやめてください」

クローディアの小さな悲鳴のような叫び声は、そんな酒場の喧噪に消される。——とその時であった。

「まったく、大の男が寄って集って見苦しいな。それでもあんたら男かよ！」

クローディアを取り囲む男達の背後から、彼らを非難する声上がる。それはいまの酒場の喧噪にも負けない、よく通る声だった。

「何だと！」

「どこのどいつだ、顔出せ！」

男達は声が出た方に一齐に背後を振り向いた。酒場は、間口が狭く奥に長い。まだ日のある時間とはいえ窓から離れた奥の席は薄暗く視界が悪い。男達は、目を凝らして声のした方を探るが、そこには空のテーブル席があるだけで誰も居なかった。周囲の客にも視線を配るが、傍観していた他の客は自分ではないと首を横に振るばかりだ。

「誰もいねえじゃねえか」

「あ、王女様もない！」

誰かが妙な事を言った。

男達は、店の奥から再びクローディアがいた場所に視線を戻した。しかし本当にクローディアは消えていた。彼らが一瞬クローディアから意識を反らしていた隙に酔っ払い達の人垣から脱出したのだろうか？ いやクローディアを取り囲んでいたのは、野次馬も含め十人はいる。この人数の誰からも悟られずに逃げるのは不可能だ。

「ど、どうなっているんだ？」

酔っ払いの男達は、この状況に困惑した。

「少し飲みすぎたんじゃないですか？」

先ほどの声がまた背後からした。

酔っ払い達は、今度こそとその声の方に振り返った。すると柱の影から見知らぬ男がふらりと姿を現した。なんと、その男の片腕には、クローディアが抱えられているではないか。

「貴様！ 俺達はこれから王女と楽しく話をするんだ、邪魔をすると言うなら……」

男達は怒りのまま相手を怒鳴りつけた。しかしその威勢は、最後まで続ける事が出来なかつた。  
なぜなら……

「何ですか、邪魔をすると言うなら、どうするんですか？」

突然クローディアを人垣から浚った男は、ゆっくり男達の前に進み出ると、にっこり微笑んだ。

「けっ、賢者様！」

「賢者だって！」

そうなのだ、突然現れた男は、あの名高い賢者のマントを着た若者であった。現れたとき暗がりでもマントの色を判別出来なかつたが、確かに濃いグリーンのマントを着込んでいる。賢者と巫女の国と謳われたティシヤナ王都内で、このマント着ている者がどういふ身分の者か、小さな子供でも知つてゐる。賢者のマントは、魔術と学問を修めた証。

「あれ、もしかして俺とやり合うおつもりですか？」

この賢者は、どこが惚けているような声で男達の前で足を止める。

「それなら仕方ない……命の保証は致しかねます。よろしいですか？」

賢者は、そういうと浮かべていた笑みを消した。そして先程までの飄々とした話口調から、酷く落ち着き丁寧なものに変わった。その声音の変化は、彼が本気でそう出来ると明示しているかのようで、ここにゐる者にとって脅しには十分だった。

「そんな滅相もございません！」

「いやだな、俺たちは……」

「ちよっと、悪酔いしているみてえです。あは、あははは……」

「そうですね、それは気を付けた方がいいですよ」

男達は、賢者の言葉を聞き終わる前に、蜘蛛の子を散らしたかのように薄暗い店のどこかに消えて行つてしまい、賢者とクローディアは、静かになつてしまった酒場の出入り口に取り残される形になつた。

「あらら」

「あららじやありません！」

静かになつたのもつかの間、今度は賢者の腕の中で静かに事の流れを傍観していたクローディアが声をあげた。

「助けていただいたのは感謝いたします。しかしいつまで私に触れているのですか、無礼ではないですか！」

クローディアは、まだ自分を抱きかかえている賢者の手を乱暴に振り払つた。腕を振り払われた賢者はというと、口をぽっかり空けた間抜け面でクローディアを見下ろしている。そして、何を思ったのか賢者は堰を切つたように笑い出した。

「ぶつ、あはははは！」

それも腹を抱えながら、酒場中に声が響き渡るような大笑だ。

「何を笑っているのです。お黙りなさい！」

クローディアの櫂が飛ぶ。

「だつてだつて、クローディア王女が、あははは！」

「私がどうしたというのですか！」

「え、俺をお忘れになられたのですかあ？」

「どちら様かしら？ 覚えがないわ」

クローディアの賢者に対する態度は大変冷たかつた。彼女の周囲には、彼女に媚び入って地位を上げようとする賢者は大勢いる。クローディアはこの賢者もその一人として捉えていた。先程の酔っ払

いは一般庶民だが、賢者と王家は主従の関係にあるので、口調や態度に手加減を加えない。クローディアは腕組みをしたまま、賢者を睨み付けた。当の賢者は、笑いすぎて腹が痛いらしく、目元に涙さえ浮かべている。

「うわ、もうその冷たい物言い酷っ！でも久しぶりに聞いた懐かしいなあ」

この若い賢者は、訳が分からないことを言う。クローディアは酔っ払いより達の悪いのに捕まったと思った。賢者はいったん笑うのを我慢すると、怒れるクローディアに向き合った。そして一度呼吸置くと口を開いた。

「クローディア殿下、本当に俺のことお忘れですか？俺は貴方の弟だと思っていたんですが、もし忘れたと言うなら……本気で泣きますよ？」

それは真面目なのか、ふざけているのか理解に苦しむ弁明だった。

「弟ですって？」

クローディアは、賢者の言い出した『弟』という言葉に一瞬厳しい表情が緩んだ。彼女には幼い頃、実の弟ように可愛がった少年がいた。しかし、その少年は遠い旅の空の下にいる。もうあれから何年も会っていないが、彼はどんな青年に成長しているのだろうか。

「何をふざけたことを言っているのです！私には弟などおりません！」

クローディアは、そう言う賢者を睨みつけた。しかし、睨みつけられたはずの賢者は、クローディアに向かって優しく微笑んでいるではないか。クローディアはこの時はじめて賢者の顔をはつきりと見た。

「……嘘」

クローディアの口から、言葉にならない声が零れる。

なぜ今までその可能性を頭に浮かべなかつたのだろうか。酒場が暗かつたからか？ それとも彼の声が記憶の中より低くなつていたからか？ いや、全ては自分の先入観のせいだ。

そのせいで目の前にある真実を覆い隠してしまつた。クローディアは自分より少し高い位置にある賢者の襟を引つ張り、賢者の顔を自分の方に近づけた。

「……キール、なのね？」

クローディアは、幼き日共に過ごした少年の愛称を呟いた。

「はい、クローディアお姉ちゃん」

賢者は、確かに返事をした。

その瞬間クローディアの中から怒りの感情も王女としての威厳も全てが遠くに追いやられるのが分かつた。代わりに沸き上がったのは、姉として弟を慈しむ感情だつた。クローディアはキールクラインの襟から手を離した。そしてその手を再び伸ばし、今度は強くキールクラインの身体を抱きしめていた。

「いやだ、こんなに背が伸びて！ 声も低くなっているし……もうっ！ 全然あなただと分からなかつたじゃないの」

クローディアはキールクラインを抱きしめると、肩口に顔をうずめて、体全体でその存在を確認した。



「おかえりなさい……キール！」

「ちよつとお姉ちゃん！ 人前ですよ！」

キールクラインは、全力で抱きついて来たクロロディアに少し焦っている様子だ。しかしクロロディアはキールクラインの訴えなど、聞き入れる気はない。

クロロディアの気持ちは子供の頃に戻っていた。幼いキールクラインとラヴィリアをよく抱っこしていた。そうしていると、本当に二人の姉になった気分になれるのだ。クロロディアのこそばゆい思い出だ。

——ああ、どうしたらいいの。わたしのちいさな弟が、こんなに大きくなって帰ってきてくれた。

クロロディアは、キールクラインの肩口で息を吸い込んだ。もうキールクラインからは子供の甘い香りはしない。旅の汚れがたつぷりと沁み込んだ服とマントは、何とも言えない独特な匂いがする。

「何を照れているのよこの子は！ さあ姉様によく顔を見せなさい！」

クロロディアは、キールクラインから少し離れると、じっくりキールクラインを観察した。キールクラインの背は完全にクロロディアを越していた。抱きしめて分かったが、体もがっしりしていた。

クロロディアの知る、子供のキールクラインはここにはいない。目の前にいるのは立派な賢者へと成長した青年だ。

「たぐいま戻りました」

「へえ、あの鼻タレ小僧が男らしくなっちゃって」

「えー、俺、鼻なんて垂らしてないよ？」

「それは言葉の綾です。それよりティシヤナに帰ってきたということは、修業の旅が終わったのね！」  
「まあ、それなりに」

「ふふ、キールのその言い方、貴方が中途半端な事で帰ってくるはずがないでしょ」

「やっぱりお姉ちゃんは何でも御見通しだ」

「それは姉ですからね。まだ私の所に知らせが来ていないという事は、城にはまだね？」

「それも当たり。城に入る前にティシヤナを見ておきたくて、街の情勢を知るには酒場辺りが手取り早いと思っただけ……まさか、帰ってきた早々、お姉ちゃんと考えが被るなんてね」

「ホント、奇遇ね」

クローディアは、キールクラインの言葉をさらりと受け流す。キールクラインに街へのお忍びや、様々ないたずらの手ほどきをしたのは、クローディアである。思考パターンが似てしまうのは、当たり前なのかもしれない。キールクラインの外見は随分変わったが、中身はそう変わっていないようだ。

と、その時であった。酒場内に城の従者達が息を切らしながらやってきた。クローディアはお忍びの際、滅多に従者を連れていない。その代わり滞在する場所を知らせるようにしていた。従者はクローディアを目視すると、素早くその前に整列した。

「姫様！」

従者達は、お忍びのクローディアに略式の礼をする。

「何事ですか？」

「はい、国王陛下がお呼びでございます」

「父が？」

「はい！ 実は先ほど次期賢王、ロイト家の長子キールクライン・フォン・ロイト様がテイシヤナにお戻りになったという情報が入りまして、賢者の学院の者達が手分けをして御身を搜索しております」

「そうですか、分かりました。父上にはすぐ戻ると伝えてください」

「はい、姫様」

「それから、賢者の学院の者達には、学院に戻るようにふれを出してください」

「しかし、姫様……」

「案ずることはありません、この騒ぎの原因はすでに私が押さえました」

クローディアは、従者にさういとチラッとキールクラインの方を見上げ、意地悪さうにキールクラインに微笑んだ。

「ねっ、そうですわよね。キールクライン？」

「そうですね」

従者達は、王女の視線の先にいる若き賢者を一斉に見た。

「この者が、キールクライン・フォン・ロイトですわ」

「姫様、本当でございますか！」

「ええ、私が可愛い弟を間違えるはずがないでしょ」

キールクラインは、この場の気まずい雰囲気<sup>キョウキ</sup>に照れ笑いをして誤魔化<sup>ごまか</sup>した。

「すいません、お騒がせしちゃったみたいですね」

「いえ滅相もございません。ご帰還お祝い申し上げますキールクライン様！」

従者達は、一斉にキールクラインの前に跪いた。そして今までクロードディア達の様子を静かに伺っていた酒場の人々が騒ぎ出した。

「あの方が、次期賢王様！」

「姫様がそうおっしゃるのだから確かだよ！」

「おい、次期賢王様がお帰りになられたって！」

「今日はお祝いだ！ 鐘をならせ！」

その場に居合わせた人々すべてが、キールクラインの帰国に沸きあがった。

「キールクライン、もう逃げられないわよ、観念なさい」

「……そう、みたいだね」

\* \* \*

キールクラインとクロードディアは従者に促されて、酒場の外に出た。するとそこには、キールクラインの姿を一目見ようとたくさんの人が押しかけていた。その人の群れは、どうやら城まで続いているようだ。

「あー、これは本当に逃げられないな」

キールクラインは、自分に浴びせられる歓声をまるで他人事のように見ていた。

「行くわよ」

その横で冷静なクロードディアが、キールクラインのマントを引つ張った。キールクラインは、ふと我に返ると自分より三つ年上の姉を見下ろした。このティシヤナを旅立つ前は、自分がクロードディアを見上げていた。しかし今はキールクラインがクロードディアを見下ろしている。

——変な感じだ。

月日はこれほどにいろいろな物を変えてしまうものなのか。

「はい、お姉ちゃん」

キールクラインは答えた。しかしクロードディアはキールクラインの返事に不満なようだ。

「お姉ちゃんじゃないでしょ！　こういう場面では、私をエスコートするのよ！　忘れたとは言わせないわよ」

クロードディアは、周りに居る人間に聞こえないように、キールクラインに小声で話しかけた。

「あ、そうでした、そうでした」

キールクラインは慌てずゆっくりとクロードディアの御前に跪いた。クロードディアはそれに合わせてキールクラインに自分の手を差し出した。キールクラインは、差し出された手にキスの挨拶をする。

「クロードディア・ルン・ティシヤナ殿下。私キールクライン・フォン・ロイトは、再び殿下にお会い出来たことを嬉しく思っております」

「私もですキールクライン。さあ共に王の元に参りましょう」

「はい」

その瞬間、城下に大きな歓声が巻き起こった。

キールクラインは立ち上がると、クローディアの手を取り、二人を取り囲んでいた群衆から迎える馬車に乗り込む。沿道は人で埋め尽くされていた。キールクラインはこの時、自分に架せられているモノの大きさを思い知ったのであった。

## 3 逃走不可

\*

城内の謁見の間に、盛大なファンファーレが鳴り響いた。キールクラインは、その音色と共に謁見の間に入室した。

謁見の間は長い直線の広間だ。大理石のフロアの上に赤い絨毯が一直線に伸びている。それを道なりに進むと数段の階段があり、その最上段に玉座がある。

キールクライン階段の手前で立ち止まると、マントを背後に払いその場に跪いた。そして深く頭を垂れる。

「国王陛下、キールクライン・フォン・ロイト、ただ今帰還いたしました」

名乗りと帰還の挨拶が終わるとはほ同時に階段の上から声が降ってきた。

「おおキールクラインよ、堅苦しい挨拶などぬきだ！ さあこちらに、こちらに上がって来なさい！」  
その声は、ヴァリトンのどっしりした声だった。キールクラインの記憶に残る国王の声と変わらな

い。  
公の場で王と臣下が直接会話をすることはない。しかし今日は王の要望に従う。キールクラインは頭を上げると立ち上がった。

「はい陛下」

そして、玉座へと続く階段に足を進めた。階段を少し昇ると王の姿と玉座がよく見えるようになる。

王は興奮気味に玉座から立ち上がると、両手でキールクラインを手招きしていた。

キールクラインは国王に促され、最上段まで上がると、王の前で立ち止まった。

「ただいま帰りました」

「よくぞ無事で」

感極まった王は、クローディアがしたのと同じようにきつくキールクラインを抱きしめた。クローディアの時ほど長くなかったが、王はキールクラインを解放した後も長い時間その姿を観察した。

とても照れくさい。照れ隠しに鼻の頭を掻く。

国王は髪に白い物が混じり少し老けてみえた。それもそうであろう。キールクラインの記憶にある国王は、五年前の姿なのだから。

「キールクラインよ、立派な青年になったな」

国王は、ようやくキールクラインに対して感想を述べた。

「ありがとうございます、義父上様」

国王は、キールクラインの言葉に目を細めた。キールクラインとラヴィリアは、幼い頃より養父でもある国王を『義父上様』と呼んでいた。国王もそれを喜んでいた。

「私の事をまだ『義父』と呼んでくれるのかい？」

「はい、陛下は私達を育ててくださいましたので……」



「そうか……では私には息子と娘が二人もいるのだな。喜ばしいことだ。のうクローディア」  
王はそう言うのと王の玉座の横に体を向けた。

「はい、お父様。キールクラインは私の自慢の弟ですわ」

——うわああっ！

いつのまに現れたのだろうか。玉座の横にはクローディアの姿があった。キールクラインは驚いて変な声が出そうになったのを必死に飲み込む努力を要した。

キールクラインとクローディアは、城からの迎えの馬車に乗り込み、城にやって来た。車上でクローディアから旅の様子など質問攻めに合い、風景を楽しむ余裕もなく城に到着した。そしてキールクラインが先に馬車から降り、クローディアの降車を手伝おうと思いつき振り返った時には、姉の姿はそこにはなかった。馬車には両側面に扉がついている。恐らく反対の扉から自分で降りたのだと推測するが、何か一言告げてくれてもいいのにと、ヘソを曲げていたのだ。

再びキールクラインの前に現れたクローディアは、先程までとは全く違う装いになっていた。

その身は深紅のドレスを纏い、ルビーのような鮮やかな赤い髪は、高く結い上げダイヤが散りばめられたティアラが飾られている。形の良い唇には紅が差されていた。その立ち姿は、まるで絵画のようでもあり、王族としての品格を有している。素直に美しいという感想が頭に浮かんだ。

キールクラインは、クローディアの短時間の早変わり脱帽した。

クローディアは先程から強烈な眼差しでキールクラインを見つめている。

その目はあたかも『国王に余計な事は何も言わないように』と語っているかのよう。いや、たぶん

正解だ。

——分かってますって……酒場で会ったとか、おねえちゃんに不利になることは、何も言いません。信用ないなあ。

心の中で愚痴を一つ。話の風向きが変わっていたことに気づくのが遅れた。

「クローディアよ。キールクラインはこんな好青年に育ったぞ。どうだ、お前もそろそろ婿を取らねばならない歳だが……キールクラインはどうだ？」

——ほえっ？　なんでそんな話題になってる！

国王は、突然特大サイズの爆弾を投下してきた。

「お互いのことをも良く知っている、これ以上の相手はいないと思うのだが……」

「ち、義父上様？　わ、私とお姉……姉上様がですか！」

キールクラインは慌てるあまり、静かな謁見の間で思わず大声をあげてしまった。しかもクローディアの事を『お姉ちゃん』と呼びそうになってしまった。キールクラインは公の前ではクローディアを『殿下』と呼ぶようにクローディアに釘を刺された。そして少しフランクになって良い場合は『姉上様』と呼び分けるようにとも。今はすんでのところで姉上様に切り替えたわけだが、この数秒で二重に肝を冷やした。

「お父様、その話は私の方からお断りします」

キールクラインが一人肝を冷やしていると、こんな場面でも冷静な王女様は、王の言葉をさらりと受け流し自分の意志を告げる。

「なぜじゃ、クローディアよ。これ以上ない良縁だと思ったのだが」

「お父様よく考えてくださいませ。キールクラインはラヴィリアの物なのですよ」

クローディアの口からも国王に負けない爆弾発言が落ちる。キールクラインは慌てて王父娘の会話を乱入する。

「あの、姉上様！ 私はいつからラヴィリアの物になったんですか！」

「この子は、何を言っているの。生まれた時からよ」

——生まれた時から……。

「……ふむ、そうであったな、私としたことが失念しておった」

——えっ、国王まで……。

どうやら親子の意見は一致したらしい。

確かにキールクラインにとってラヴィリアは大切な存在で優先すべき対象だ。しかし非常時は最優先とはならない事をお互いに魂に刻み込んできた。命を賭して支えるのは、主君ただ一人。幼少の頃よりそう教え込まれてきた。しかし、まさかその主君から『お前はラヴィリアの物』と断言されてしまうとは……キールクラインは全身から言い知れぬ虚脱感を覚えた。

「は、ははは……」

「それにお父様。私にとってキールクラインは、今も昔も可愛い弟なのです。それ以上の感情が持てるはずがありませんわ」

「そうか……ふむ、良い考えだと思ったのだが残念だ。私の今一番の悩みは、姫の結婚なのだが……」

「私は何も結婚しない、などと申しはいないでしょう。私は妃ではなく女王となる身、その夫となる人物は、慎重に見定めたいのです」

「そう言われてもな、最近各地がうるさくなっておつてな」

「あの義父上様、姉上様。私のことをお忘れにならないよう、お願い申し上げます」

「おお、すまぬな。クローディアの婚姻話になると、時と場所を忘れてしまう」

「いい加減になさってくださいませ、お父様！」

「すまない」

王は玉座の上でも娘の結婚相手について悩ませているのと思うと、少し同情の心を寄せたくなる。その最愛の娘は、父を迷惑そうに煙たがっている。普通の親子の姿を垣間見た。

「ところで今話に出てきたラヴィリアなのだがな、きつと驚くぞ」

「お父様、キールクラインはおそらくラヴィリアに会つてきていますわ」

王はクローディアの言葉に首を傾げる。

「なぜ分かるのだ？」

「そういう約束なのですわ。そうよね？」

クローディアはキールクラインの方を見ると、王にも話が分かるようにと説明を促した。

「はい、旅立ちの際一つ約束を交わしました……帰国した際は必ず最初に会いに行くと、陛下申し訳づきございません、私は王城に上がるより先にラヴィリアの元に参りました」

「……そうか、まあよいまあよい。男なら守らなければいけない約束の一つもあろうて。それならば

話は早い。ラヴィリアは美しい娘になっていたであろう?」

「はい、間違えました」

「二人は幾つになった?」

「私もラヴィも来月が生まれ月ですので、ちょうど十七になります」

「そうか十七か……早い。もうそんなに経つのか……よし、今宵はそなたの帰還の祝宴会を行うぞ、

こんなめでたい日はない!」

「お父様、準備は私にお任せください」

「クローディア、任せたぞ。キールクラインは祝宴会までしばし旅の疲れを休めるがよい、ロイト家にも姿を見せておやりなさい。そなたの母上が首を長くして待つておるぞ」

「はい、ありがとうございます」

\* \* \*

キールクラインは謁見の間から退出して、城の長い階段を降りていた。城は広大なため移動するのにも一苦労だ。ようやく階段を下り終わると歩みを止めた。

「まったく……突然現れるのは止めてください、心臓が悪い」

独り言が多くなったと自認していたが、今のは違う。

話しかけた相手は、クローディア王女であった。先ほどまで玉座の横にいたというのに、どうしたら自分より先回りが出るのだらうと、疑問が沸く。

「当たり前よ、私の方がこの城のことをよく知っているのですもの。それよりキール、あなた王に言われた通り実家に帰る気なの？」

「王様命令ですから……それに俺だって久しぶりに母さんには会いたいですよ」

「……なら何も言わないわ。じゃあまた後でね。早めに帰ってくるのよ、いろいろ支度があるのだから、逃げたら承知しないわよ」

「はいはい、お姉さま」

クローディアはキールクラインの返事を聞くと、手を振ってじゃあね！と去って行ってしまった。廊下に一人取り残されたキールクラインは、クローディアとの会話のある一節が脳内をリフレインする。

——実家に帰る気か……

キールクラインは明かり取りの窓から空を見上げると、ため息を漏らした。『実家』という単語に、多少なりともストレスを感じている。それはまるで小魚の骨が喉に引つ掛かるような、小さな痛み。しかし確実に気分を憂鬱にさせる。小骨の正体は分かっている。

キールクラインの実家ロイト家は、賢者最高峰の家系と言われている。賢者の資格を持っているのが当たり前。しかし一番血の濃い当主家に生まれたキールクラインは、一族の輪から少し外れている。生まれて間もなく国王に引き取られ、乳母のマーシャに育てられた。教育係と従者は城の中に仕えて

おり、実家のロイト家に帰る必要はなかった。

里帰りは年に数回ほど、そんな状態ではロイト家の中には、自分の居場所などないに等しい。戻るのを躊躇う理由は、それだけではないのだが……。

キールクラインは、先程乗ってきた馬車に再び乗り込むと、一路ロイト家へと向かった。王城よりは見劣りするが立派な門を潜り、馬車は止まる。馬車の前には大勢の使用人が、キールクラインを迎えに出てきていた。

キールクラインは城を見たとき「帰ってきた」と思ったが、ロイト家の門を潜ってもなんの感動も沸いてこなかった。それより圧迫感で息苦しかった。足を一步外に踏み出すと、人々の声がわつと耳に入る。

「御帰還おめでとうございます、キールクライン様」

「おめでとうございます」

「お帰りなさいませ！」

その多くが見覚えのない者たちばかりで、どう声を掛けていいのか悩む。おそらく表情が強張っているであろうことを自覚する。人々は館の奥まで続いている。ようやく人垣も終わりが見えた時、知った者の顔があった。キールクラインは、足早に進み出るとさつと頭を垂れた。

「父上、母上、ただいま戻りました」

「よぞ戻った、キールクライン！」

キールクラインの父は、キールクラインより少し背が低く中年の終わりにさしかかっている。威厳

のある風体をしており、髪の色は父ゆずりだった。

「キールクライン、よく無事で」

母は息子の手に縋り付くと、碧色の瞳からほろほろと涙がその頬に伝う。

「母上、泣かないでください。あなたの息子は無事に帰ってきました。どうか笑ってください」

キールクラインの母は、息子の願いを聞きいれ、精一杯の笑顔を見せてくれた。その表情は、キールクラインによく似ている。顔は母親ゆずりだった。

「私より大きくなりおって、ところで賢王になる為の試練は無事に終わったのか？」

「はい、もちろんでございます。習得すべき魔術の全てを身に着けてまいりました」

「……それならば良いのだが、たった五年で戻るとは、本当に大丈夫なのか？ 現賢王の際は、もう少し時間が掛かったぞ」

キールクラインに課せられた試練とは、各地に伝わる全属性最高位の魔術の習得だった。全ての習得には賢者の資格を持っている者でも、容易ではない。魔術の属性には生まれ持った、得手不得手がある。どうやら父は息子を疑っているようだ。

「父上、今のお言葉は、私をお疑いになつてということでしょうか？」

「あなた！ 何て事を言い出すのです。キールクラインは努力をして短期間で戻ってきたのですよ。ここは褒めてこそです」

母が父の言葉に怒ってくれた。それだけで十分だと思ふ気持ちと、売り言葉に買い言葉で応戦してしまった自分の浅はかさを恥じた。



「ありがとうございます母上。父上、生意気な口をきいてしまい申し訳ございません。一日でも早く戻ろうと寝る間も惜しんで精進いたしました。証拠にいつでも全魔術をお見せすることも出来ますので、おっしゃってください」

こころは母の顔を免じて引くべきだ。

「……そうか。疑って悪かったな。今のは、私に非があった。詫びよう」

「いいえ、よろしいのです」

「だがこちらは引かぬ。キールクライン、お前は、国王殿下に謁見するよりも先に、ファイファー家の小娘のところに行ったというのは、真か！」

——やはり、そう来るか。

キールクラインは、この話題が上がることをはじめから覚悟していた。こうなるのが分かっていたため、実家に戻るのを、素直に喜ばなかったのだ。

「はい、父上。ファイファー家のラヴィリアとは約束がありましたので」

「なんたることだ！ よりによってファイファー家の！」

「お言葉ですが、父上。ラヴィリアは私にとって幼少の頃より一緒に育った、大切な存在なのです。将来同じ役目を果たす同志と……」

「黙れキールクライン！ お前はファイファー家に毒されおったか！」

「あなたやめてください！ せつかくキールクラインが帰ってきたのですよ」

「だがな！ 寄りによって……」

「父上、前々からお聞きしたいと思っていたのですが、何故そのようにファイファー家を毛嫌いされるのですか？」

「……簡単に説明など出来るか！ 根本的に我々とあちらでは氣質が違ふのだ」  
「では説明出来ないような理由でいがみ合っているのですか？」

母が間に入るが、父息子の会話は平行線をたどるばかりだ。

「あなたも、キールクラインもおやめなさい！」

とその時であった。三人の前に一人の少年が小走りで近づいてきた。

「大きな声を出されてどうなされたのですか？」

少年は一人前に賢者のマントを着ている。だがそのマントはこの少年にはまだ大きいようで、裾を少し引きずっていた。

少年は二人を「父、母」と呼んだ。声を荒げる二人をどう相手してよいのか、戸惑っているようだ。

「リーゲルだね、大きくなったな」

キールクラインは、少年に歩み寄るとにつこり微笑んで頭を撫でた。

年の頃は、キールクラインより四、五歳年下であろうか。不思議そうな面持ちでキールクラインのことを見上げている。

「顔を忘れられても仕方がないか」

このキールクラインに頭を撫でられている少年は、ロイト家の次期当主。名前をリーゲルト・ティム・ロイト、キールクラインの五歳違いの弟だ。

リーゲルトがキールクラインと最後に会ったのは、七歳の時だ。それからお互い姿がずいぶん変わったのだからこの反応も仕方がない。

「……もしかして、キール兄様ですか？」

「そうだよ！」

ようやく兄であることに気づいたのか、リーゲルトは顔をパツと明るくさせる。

「お帰りなさい！」

そして、抱き付かれた。今日はいろんな人に抱き付かれる日だと思ふ。

ロイト本家では、長男が賢王になり、次に生まれた者が家の後を継ぐことになっていた。もし跡継ぎがない場合は、分家から養子を得るのが、決まっていた。

ラヴィリアのファイファー家では、その後子供が産まれなかったため、ラヴィリアの従弟にあたる男子が跡継ぎに選ばれた。その情報は、ラヴィリアの口から直接聞いた。『私にも弟が出来た』と自慢されたのだ。

リーゲルトは、キールクラインの帰還に素直に喜んでるようだ。

この家にも、そんな弟がいると思ふと救われる。

キールクラインは、リーゲルトの身体をそっと抱き返す。そして彼の耳に口を近づけると、そっと囁く。

「リーゲル、俺の分まで母上を大切にしてくれよ」

「兄様？」

「ごめんな、出来ない兄で」

キールクラインはリーゲルトを解放すると、父と母に向き直り深々と礼をした。

「父上、母上、私はこれにて失礼いたします。今晚ティシヤナ国王陛下が私の帰還の祝いに、祝宴会を開いてくださるそうです。正式な招待があると思いますので、是非おこしください」

キールクラインは、言い終わると三人に背を向け、館の玄関へ歩き出した。

「兄様！ お待ちください」

リーゲルトは、去ってゆくキールクラインを追いかけようとしたが、その行動を制止するかのよう  
に、父の手が伸びた。

「放っておけ！」

「父上様！」

「あなた！」

「あの子は……いやキールクラインは、ロイト家の人間ではあるが、違う世界の人間だ。追わなくていい」

キールクラインは、父の言葉から逃げ去るようにして、館を後にした。

馬車に乗るまで、一度も振り向くことはなかった。

父も母も弟も嫌いではない。父の口うるささも我慢出来る。だがロイト家の気質だけは好きにはなれなかった。ずっと城の中で育ったせいなのだろうか。ラヴィリアと共に過ごしたため、両家の対立

は目の前でよく見ていた。全てを好きだと言つてはいけない。

馬車に乗り込んだキールクラインは、自分の手荷物を漁った。その中には、修道院を去るときに、マーシヤから受けとったマフィンが入っていた。実家に帰ったらリーゲルトと一緒に食べようと思ひ、持ってきたものだったが、ムダになってしまったようだ。キールクラインはマフィンを千切ると、口に頬張った。甘いはずのマフィンは、少し苦く感じた。

\* \* \*

キールクラインは、実家から真つ直ぐ城に戻ってきた。本当はもうすこしテイシヤナの城下街を馬車で見て回りたいのだが、実際にクロードディアに言われた言葉が耳を離れなかった。幼少の頃、怒ったクロードディアが乳母のマーシヤの次に恐ろしかった。女性を怒らせてはいけないと幼心に学んだものだ。どうやら自分は、今も昔も怖いものに変わりがない。キールクラインはそんな自分に苦笑する。

馬車が城内の敷地内に入り静かに止まる。キールクラインは馬車の扉のノブに手をかけて慌てて引つ込めた。

——おっと。

今日から馬車の戸は自ら開けてはならない。開けてもらうのを待たなくてはならない。それがキールクラインの王城での立場だ。数年そういう生活から離れていたのに、なんでも自分でやろうとしてしまう癖が出てしまった。習慣とは実に恐ろしい。

城には帰ってきたが、その後の行動は指定されていなかった。

さてさて、身支度があるとはいえまだ時間に余裕があるだろう。

おまけに今なら成長したキールクラインの顔を知る者はいないはずだ。これは城の中を自由に歩き回る絶好のチャンス。

——こういう場合、ギリギリまで逃げるにかぎる。

しかし、キールクラインの計画は扉が開いた瞬間、脆くも崩れ去る。

「キールクライン様、お帰りなさいませ。お早いお戻りで」

馬車の扉が開き地面の上に降りると、扉のすぐ脇に男が恭しく跪いて控えていた。服装は白に金の刺繍の入った制服であった。それは臣下の中でも一握りの高官が着ることを許されるものだ。頭を垂れているので表情は見えないが、薄い金髪を真ん中で分け自然に流している。

キールクラインはこの金髪に見覚えがあった。

「あ、チェスト……」

キールクラインは、この男を『チェスト』と呼んだ。

チェストと呼ばれた男は、キールクラインに名前を呼ばれたことでその場から立ち上がる。

立つとキールクラインより背が高く、瞳は薄茶の切れ長だ。実に女性受けしそうな甘いマスクをしている。本人も自分の容姿の良さに自覚があるのだろう、身だしなみ以上に外見の手入れをよくしているのが見受けられる。今はその整った口元に薄く笑みを蓄えキールクラインに近寄ってきた。

「なんだ、思ったより早く追いついて……っ!?」

チェストは馬車の扉にドンと手をつくくと、キールクラインが逃げないように自分の身体と戸の間に追い込んだ。

そして周囲に極力聞こえないよう、キールクラインの耳元に小声でささやく。

「やってくれたな、このくそガキ!」

どうやら彼はかなりのご立腹のようだ。顔は笑顔のままだが、荒い鼻息が掛かる至近距離から見ると目は全然笑っていない。こういう目のことを『据わっている』というのだろうか。

——うわあ、これはヤバイやつ。

キールクラインは両手の平を顔の横に上げると降参のポーズをしてみせる。

「は、話せば分かるから。ねっ」

「何が『ねっ』ですか! 私が各所からどれだけお小言を食らったと思います? 聞きたいですか?」

ああ、聞きたいですよね?」

怒りに任せて愚痴を捲し立てている彼は、チェストIIボロニア。

彼はキールクラインの唯一無二の従者にして試練の旅に同行した重臣である。なぜ彼がここまで怒っているかというと、キールクラインには心当たりがありすぎた。

「い、ごめんなさい！」

平身低頭許しを乞うしかない。従者に頭を下げる主君とはいったいどうなのかと思うが、それがキールクラインとチェストの日常であった。

「謝って済むなら司法はいりません！ まさか私も最後の最後で撒かれるとは、思いもみませんでしたよ」

チェストの悲鳴に近い訴えが頭の上から聞こえる。

大切な事なのでもう一度言うが、チェストはキールクラインの旅に同行していたのだ。しかし本日キールクライン一人でテイシヤナに足を踏み入れた。つまりは、チェストは帰路の途中キールクラインに置き去りにされたのだ。チェストはそのことで怒っている。

それは今から数日前の出来事。鳥も寝静まる深夜、キールクラインは宿泊していた宿屋を一人でこつそり出立した。夜通し全力で移動したのでチェストより半日は先行出来たようだ。しかし賢者相手に半日で追いついてくるとは、この従者の根性も相当なものだと感心してしまう。

キールクラインの帰国は、国の一大事だ。チェストの話では事前に帰国の連絡を入れる手はずでいたようだ。しかしキールクラインはその連絡の直前にチェストの前から姿を消した。

「本当に申し訳ございませんでした！」

「いつも言っているでしょう。坊ちゃんが自由に動きたい時は上手く取り計らうと！　なんで信用してくれないんですか」

チェストは、キールクラインを『キール様』か『坊ちゃん』と呼んだ。人目がないとき限定だが、



子供の頃からの付き合いのため、今でもこう呼ばれている。

話を戻すが、もし関係各所にキールクライン帰還の連絡が入っていたら、ラヴィリアに最初に会いに行くという約束は守れなかっただろう。その事を知っていたので失踪したのだ。

これがどういう事か重々承知している。怒られて当たり前なのだ。全面的にキールクラインに非があるのだから。だから今日は全力で謝る他ない。

「全面的に俺に非があります……でも、チェストを巻きこめなかった。本当にごめん！」

たぶんこの敏腕従者に相談すればラヴィリアに上手く会わせてくれただろう。しかしキールクラインはそのせいでチェストにいらぬ中傷が飛ぶのが怖かった。キールクラインの従者を外されるならまだいい。チェストはロイト側の人間、一度信用がなくなれば一族の中で生きてはいけなくなる。それくらい両家の関係は拗れているのだ。キールクラインがラヴィリアに会いに行った事を知った父でさえ、数年ぶりに戻ってきた息子にあの塩対応だ。大切な臣下を巻き込むわけにはいかなかった。

チェストは主人の言いたいことが分かったのか、ため息を漏らすとキールクラインを解放した。どうやら怒りの鋒を収めてくれたようだ。

「そこまで分かってやったんですね。……ご実家でずいぶん怒られたでしょうに」

「……まあね予想通りの反応だったよ。今、めちやくちや心が折れています」

チェストは、キールクラインの肩に手を乗せるとポンポンと二度叩く。それはまるで子供をあやすように優しい。

「お疲れさまです」

「チエストなら許してくれると思った」

キールクラインは顔だけ横に傾けると、上目使いでチエストを見やる。

「……あなたはいくつになつたんです？ もう甘やかしませんよ！」

この従者チエストはキールクラインが六歳の頃から仕えてくれている。歳はチエストの方が十歳年上だ。幼少の頃、ベソをかいて彼の背に負われたのを覚えている。キールクラインにとつてクローディアが姉ならば、チエストが兄だった。チエストにはいつも貧乏くじを引かせてしまい悪いとは思っている。おまけに試練の旅に付き合つたせいで婚期が遅れてしまった。これは主人である自分が責任を持つて気立ての良いお嫁さんを見つけてこなければならないと思つている。

チエストは一通りキールクラインにお小言を言い終わると、再び従者の顔に戻る。キールクラインの横にすつと控えると手を二度打った。

その音を合図に小奇麗な女性達が静かに現れた。全員キールクラインに恭しく挨拶をすると、チエストの傍らに身を屈め控える。彼女たちは服装から王城に仕える女官だ。

「さて反省していただけたようなので、この後は私に従つていただきますよ。女官の皆々様方、手加減は無用でございます。取り掛かってください」

チエストがそう告げると女官達は一斉に動き出す。

「チエスト様、かしこまりました」

——へっ？

女官達はキールクラインを取り囲むと、その身から手早くマントと手荷物を奪い取る。

「キールクライン様、どうかお許しくださいませ」

女官達は口では詫びているが、手を止める事はない。キールクラインは突然の展開に口をパクパクさせるだけで、何も対応が出来なかった。

「チェスト、何、これ？」

ようやく絞り出した声は、チェストへの助け舟だった。

「クローディア殿下のご命令でございます」

「はいっ？ 殿下の命令?!」

「はい、キールクライン様がその小汚い格好で城内をフラフラされては困るとのことです。お逃げにならないようにしっかりと確保した後、速やかに旅の垢を落としていただくようにと」

「……そ、そうですか」

キールクラインはただ笑うしかなかった。女官達も釣られてクスクスと笑っている。

いくら自分にサボリ癖があるとはいえ、ここまで警戒されるとは思わなかった。キールクラインにサボることを教えたのは、他ならぬクローディアである。

——あの王女様は、自分のことを棚に上げてえ！

それをチェストに命じたのも見事な采配だ。一度逃げられているチェストは意地でもキールクラインを逃がさないだろう。女官を集めての万全を期しての対応だ。キールクラインは今にもクローディアの高笑いの幻聴が聞こえてきそうだった。

今回はキールクラインの行動パターンを熟知しているクローディアの勝ちのようだ。

——とほほ、俺の負けか。

\* \* \*

キールクラインはまず城の浴室に案内されると、旅の垢を落とすため湯浴みをするようになった。湯浴みが終わると今度は散髪が待ち構えていた。そこでは疎らに伸びていた髪を、均一に切り落とされる。やつと衣装部屋にたどり着いたときは、窓の外は日が傾きはじめていた。この時点で主人には疲れが見えている。たった数年だが、城の外で生活をしてきた彼にとって、一連の時間は苦痛でしかないのだろう。

「服は自分で着ても……」

「そうは参りません！」

キールクラインの言葉は女官達に聞き入れてもらえなかった。キールクラインは、諦めて彼女らに着替えを任せることにした。その間チェストは、傍らに控えていた。主人はこの期に及んで逃走するような腑抜けではないことは知っている。しかし念には念を入れて、見張っている。こちらに数度『助けて』と言いたげな視線が向けられるが、無視をした。

「慣れてください」

「はい」

キールクラインのために用意されていた服は、今まで着ていたものとは比べられないほど、上等な布地を使ったものだった。賢者の服には、見事な刺繍が施され、長旅で色がくすんでしまった賢者のマントは、新品のものが用意されていた。そして数えるのが面倒なほどの装飾品の数々、これらには王家の紋章がさり気なく施されている。この分だと、キールクラインの体重は一、二キロ増えそうだ。キールクラインは、『ラヴィの気持ちちが理解できた』と独り言を呟いている。

身支度がすべて終わると女官達は、キールクラインに恭しくお辞儀をしてから部屋から出て行った。キールクラインは、女官たちが全員外に出て行くのを確認すると、鏡に映る自分の身なりを確認した。「これ誰だよ？」

鏡の自分に向かってそう呟いていた。チエストは主人に近寄る。

「そちらが本来の姿です」

数時間前までは、主人はくたびれた賢者の風体だったが、今はどこから見ても貴族の子息にしか見えない。

腐っても鯛。いやいや腐ってはいなかったか。キールクラインは、元から殿上人だ。本来ならばチエストの身分の者が気楽に話しかけられない。たまたま縁があり、従者として仕えることになった。キールクラインの姿は、なかなか堂々としていて様になっているので、内心従者として鼻が高い。つい口がにんまりとってしまう。まあ中味は変わってないので、注意を怠ってはいけなが……

「あーあ、あの格好気に入っていたんだけどな」

「これのことですか？」

チェストは、布の包みから色褪せた緑色の布を取り出した。それは先ほどまでキールクラインが身に着ていたマントや服だった。

「それぞれ！ やっぱり持つべきものはチェストだね」

——そんなことわざを作らないでほしい。

キールクラインのことだ、今まで着ていた服や持ち物は、手元に置いておきたいだろうと予想がついた。そこで着替えを手伝っていた女官達から一式貰っておいた。伊達に付き合いは長くない。

「煽ても何も出ませんよ。だいぶ傷んでいますし、どれを残しますか？」

「とりあえず一式取っておいて！ あと……洗濯をしておいてほしいです」

確かに。この服たちがどれだけ洗われていないのかチェストは知っている。洗濯は必須だ。

「かしこまりました。女官にキールクライン様が記念に残しておきたいと伝えておきます」

とその時だった、部屋のドアが数度ノックされた。

チェストが扉を開けると、来客を確認して室内に招き入れる。数人の城に仕える文官達が入室してきた。彼らは城の政や城内の出来事を取りまとめるのが仕事だ。

文官達はキールクラインの前に跪くと、一声にキールクラインに祝辞を述べはじめた。

「キールクライン様、本日はおめでとうございます」

「ありがとうございます」

「キールクライン様、陛下並びに各家の当主の方々、テイシヤナに滞在中の要人の皆様がお待ちです」

「わかりました」

チェストは対応を何も伝えていなかったが、主人はそつなくこなしている。これなら大丈夫そうだと、胸を撫で下ろした。しかし

「俺、終わるまで体力持つかな……」

チェストの横を通り過ぎたとき、ポツリと弱音を吐いてみせた。

——まあそうでしょうね。

「頑張ってください」

そう伝えるしか、チェストにはできなかった。

キールクラインは、迎えの仕官達に先導されながら城の中を移動した。チェストはさらにその後ろについた。文官達がキールクラインを案内したのは、数時間前に通された謁見の間へ続く廊下だった。

「ねえ、なんで謁見の間なの？」

キールクラインが小声でチェストに質問してきた。

キールクラインは、何故謁見の間に案内されるのか分からなかった。チェストは、キールクラインの質問の意味が理解出来た。城の中には祝賀会に相応しい演舞場やホールなどの設備がある。しかし今向かっているのは王に謁見するための、長い直線の大広間だ。人々が歓談などをする祝賀会には、利便が悪い場所だ。

「どういう段取りなの？　まずは国王陛下にお会いしてからとか？」

チェストはキールクラインの疑問に答えなければならぬ。一つキールクラインに黙っていたことがあった。どうやらそれを告げる場面に来てしまったようだ。

チェストは立ち止まると先導していた士官たちに声をかけた。

「皆様少々お待ちいただけますか。主人にお伝え損ねた事項がございます。しばしお時間を頂戴いただきます」

文官たちは、分かりましたとお急ぎください。と言うと廊下の両脇に控えた。

「チェストどういふ事だよ」

「白状します。チェストは坊ちゃんに少々いじわるしました」

「……はあ？」

「今日のこれより行われるのは、祝賀会ではありません」

チェストは知っていた。この後キールクラインに起こる事態を。しかし彼はそれを今まで黙っていたのだ。背任行為と言われるかもしれない。

「じゃあ何があるの？」

チェストは、その質問に答える気はなかった。答えてはいけなと思った。

キールクラインは、しばらく答えを待ってチェストを睨みつけていたが根負けしたのか、それに綺麗に整えた髪を無造作にかくと、深いため息をついた。

「……それチェストの独断で黙っていたわけじゃないでしょ。どうせ裏で動かしていたのは……まったく俺はいつまでも王女様の手の上なわけか」



クローディア王女からの口止めがあつたのは確かだ。しかしその要請を飲んだのはチェスト自身だ。自分はキールクラインの味方でしかるべきなのに。

「俺のこともうちよつと信頼してくれてもいいのに」

「どの口が言っているんですか？」

「……確かに」

そういうとキールクラインは文官に聞こえないよう声を押さえて笑う。数えきれない前科が彼にはある。

「キールクライン様、ここからはお一人で」

チェストはキールクラインの前に片膝をついて跪く。

「そんな、心の準備が何も出来ていない」

「大丈夫です。出来ませう」

チェストは幼少の頃よりその背を見てきた。出会った頃は、背がチェストの腰高ぐらいまでしかなかった。自分に見せる顔は、どこか頼りなくて甘えん坊だが、どこに出しても恥ずかしくない賢者だ。

その両肩に重圧を背負って、信念を折られまいと足掻く姿を。賢者の長になるといふ重圧はいったいどれだけのものだったろうか。チェストは想像するしか出来ない。

「チェストは知っております。キールクライン様は秀でた才能をお持ちだ。しかしそのことに胡坐をかきことなく努力を怠らない。なのに最後の一步でいつも怖気づく」

キールクラインはこくりと頷く。

チェストは立ち上がると、キールクラインの両肩を支え謁見の間の方へ向き直させた。

主の小さかった背は、屈んで視線を合わせる必要がないほど成長している。

「私がお助けできるのはここまで……後ろでちゃんと見ております。さあ顔を上げて前を向いていつてらっしゃいませ！」

チェストはそう耳打ちをすると、キールクラインの背中を力いっぱい押した。

キールクラインは、押されたことでヨロヨロと前に進み出る。チェストの方に振り返ろうとしたのか立ち止まった。しかしそれを堪えて文官たちを携えて歩き出した。

キールクラインはチェストに見送られて、晴れ舞台の大扉を潜る。

——いつてらっしゃい、私の坊ちゃん。

チェストは胸の高さで小さく手を振る。その場で主の後ろ姿を見送った。

\* \* \*

文官達は扉の前で立ち止まった。こちらでお待ちください、まもなく扉が開きます。準備ください、  
と言いつ添えてその場を退いてゆく。この扉の向こう側が謁見の間だ。

「キールクライン・フォン・ロイト様！」

入場者を知らせる呼び声と共に、目の大扉がゆっくり開いてゆく。扉の向こう側の光景は、先ほどキールクラインが訪れた時とは様変わりしていた。

——こ、これは、いったい……。

昼は、国王と王女の座とそれに続く階段があるだけだった。しかし今は何百もの人の視線があった。もちろんその場には、祝宴会の準備など出ていない。玉座へ続く赤い絨毯の両端には、ティシヤナの大臣をはじめ、各家の当主、ティシヤナに滞在中の他国の要人達が並んでいる。

全ての人々が第一級の正装をしている。キールクラインが歩くべき道を教えてくれていた。

そして一番驚いたのは、玉座の両脇にキールクラインの叔父にあたる賢王と、ラヴィリアの叔母にあたる巫女王の姿があった。

キールクラインは、自分の置かれた状況を瞬時に理解することが難しかった。

数刻前に会った国王は、『祝宴会をする』と言っていたはずだ。しかし数分前従者のチェストは、これから起こるのは祝賀会ではないと教えてくれた。

——これじゃまるで、戴冠式だ。

人々の視線に固まっていたキールクラインに、仕官がそっと近づくと耳打ちした。

「キールクライン様、どうか陛下の御前へ」

その言葉に我に返ると、赤い絨毯の上を人々の注目の的となりながら歩んだ。その途中には、先程会った両親と弟の姿もあった。キールクラインは、玉座の階段下まで行くと跪いた。

そして、無礼は承知していたが、国王に話し掛けた。

「国王陛下、これはどうということなのでしょう？ 私には、この状況がつかめません」

しかし、誰もキールクラインの行動を非難する者はいなかった。

「キールクラインよ、お前に何も告げていなかったことは詫びよう」

「勿体無いお言葉です」

「キールクラインよ、よくお聞きなさい。そして皆の者も聞くのだ。本日ロイト家の長子キールクライン・フォン・ロイトが試練の旅を終え、無事ティシヤナに戻った。これはティシヤナ王国にとって大変喜ばしいことだ。そこで皆が集まってもらったのは他でもない、私はこの良き日にキールクライン・フォン・ロイトに正式に次期賢王の位を与えようと思う！」

室内は、国王の宣言にどよめきの声があがった。

しかしそれは徐々に歓喜する声から、ティシヤナ聖王都の繁栄を称える声へと変わっていった。

キールクラインは生まれた時から賢王になることを決められていたが、それは曖昧で暫定的なものだった。だが試練の旅を成功させたキールクラインは、賢王になる資格を全て満たしたことになる。もはや誰も賢王就任を反対出来る者はいない。試練の旅は、困難かつ危険なもので有名だった。過去、試練の旅に出て達成出来なかった者もいる。

キールクラインは、国王の突然の宣言に呆然とするしかなかった。

「キールクラインよ、承知してくれるな」

国王は呆然とするキールクラインに語りかけた。国王の言葉に今まで騒がしかった室内が、水を打

ったように静まり返った。その場にいる全員がキールクラインの声を待った。

「陛下」

キールクラインは、自分を取り戻すと至極真面目な表情で答えた。

「私は今日試練の旅より帰還致しました。しかし、私は……人間としてはまだまだ未熟者でございます。到底次期賢王の位を受ける器ではございません」

つまりキールクラインの答えはノーだった。しかし国王はそんなキールクラインに優しく微笑を投げかけた。

「案ずるでないキールクライン。私はもうしばらく王の席を退くつもりはない。お前が賢王としての叡智を揮うのは、我が姫クローディアが王位に付いたときだ」

国王は、隣に控えているクローディアの方を指し示した。

「そうですね、キールクライン」

キールクラインは、はっとクローディアを見上げた。

「あなたは私の賢者なのです、私の賢王なのです。これはあなたが生まれた時から決められていたことと」

クローディアは、キールクラインに真っ直ぐ視線を注いで語りかけた。キールクラインは、黙ってクローディアを見つめ返す。クローディアもキールクラインの視線を真っ向から受け止めた。

「殿下、私がお仕えるのは殿下ただ一人と。幼き日より誓いを立てて参りました。その心は今も変わりません」

平常心を取り戻しはじめたキールクラインは、持ち前の思考を動かしてクロードディアの心を探り始めた。今日のこの場合は、自分が帰還して数時間で用意が出来るものではない。前々から準備されていたはずだ。クロードディアは、キールクラインに再会したときからこうなることを知っていたはずだ。しかし、このことをキールクラインに告げなかった。それはどうしてなのか？ キールクラインは、ありとあらゆる可能性を脳裏に巡らせた。肯定的な考えも否定的な考えも平等に分析にかける。

自分を試しているのだろうか？ 俺が賢王に相応しいかどうか、様子を見るために黙っていたのだろうか。

——いや、それは違うか。

キールクラインは、クロードディアの一連の行動を思い返した。帰還を心より喜んでくれた。あの態度に嘘偽りがあるうか。自分に何も告げなかったのは、自分に対する絶大な信頼と、幼い頃からの逃避癖を熟知している姉から弟へのいたずらだ。これは俗に言う、サブライズというやつだろう。

自分達はどんな場に置かれても心だけは通じていると信じている。そうでなければ、腹を割って語り合った子供時代の時間は、ただのオママゴトと同じになってしまう。しかしこの数年間は、お互いに会うことさえなかった。もしその間にキールクラインのモノの考え方や性格が変わったとするならば、またそれはクロードディアにも有りえる。これはお互いに危険な選択だ。

——俺の性格の半分は、あなたの影響で形成されているので、弟の不始末はちゃんと責任とってくださいね。

キールクラインのクロードディアに対する思考は、マイナスには傾かなかった。反対に思わず破顔し

てしまいそうになるようなものだった。どうやらそれはクローディアも同じだったらしく、黙ってキールクラインを見つめていた口元が微笑んでいる。サプライズ成功にご満悦のようだ。

「キールクラインよ、クローディア王女が王位に付くまで、時間は十分にあるのだ。賢王としてふさわしい知識と経験を積むのだ。承知してくれるな」

キールクラインは、国王とクローディアを交互に見上げた。

——いいでしょう。俺はいつでもお姉ちゃんの賢者でした。賢王になったとしてもそれに変わりはない。

この問い掛けは、今までも、そしてこれからも、声にしてクローディアに伝えることはないだろう。しかしキールクラインは、自分の無言の聲がクローディアに届いているという確信があった。

「はい陛下、賢王の位、お受けいたします」

それに、クローディアは王位継承という自分よりもさらに重い定めから逃げず戦っているのだ、自分だけ逃げるのは、男として恥ずかしい。

キールクラインは、二人に深々と頭を下げた。

「よぞぞ承知してくれた」

再び謁見の間に歓喜が上がる。国王は両手を広げて、室内にいる者に静まるように命じた。

「皆の者、喜ぶのはまだ早いぞ。今日はもう一つ皆に良い知らせがある。私は次期巫女王候補ラヴイリア・フォン・ファイファアの禁を解除することをここに宣言する」

「えっ？」

キールクラインは、耳を疑った。ラヴィリアの禁を解除するということは、彼女も巫女王の修業が終わったことを意味する。つまりキールクラインと同様に巫女王になる資格が満たされたことになる。そしてさらに重大なことは、今まで架せられていた数々の制約から解放されるのだ。

「そして、キールクライン同様、正式に次期巫女王の座を与えようと思う！」

「ラヴィリア・フォン・ファイファー様！」

謁見の間に、ラヴィリアの入室を知らせる声が上がった。キールクラインは、振り返り入口を凝視した。

「ほとんどの者が、ラヴィリアの姿を見るのは始めてのことになるであろう。よくその眼で見るがよい。この者が次期巫女王のラヴィリアだ」

本日、謁見の間は三度目の歓声と人々のどよめきがあがる。開いた扉の先には、美しく着飾ったラヴィリアの姿があつた。数刻前、身支度を整えた姿を見ているが、あれはやはり普段着に過ぎない。この場にいる誰よりも輝いているだろう。

ラヴィリアは、大勢の前に姿を見せるのはこれが初めてとは思えないほど堂々としており、気後れがなかった。その美しい姿に、謁見の間のため息が漏れる。確かに顔形はラヴィリアだ。しかし先ほど修道院で会った人と同一人物なのか疑いたくなる。

ラヴィリアは、キールクラインの横に並ぶと、一瞬視線をこちらに投げた。それは一秒もないアイコンタクト。キールクラインは、ドキリと心臓が脈打つのを自覚する。ラヴィリアは何もなかったかのように、長いスカートの裾を掴むと玉座へ跪いた。



「陛下、この度は私の禁を解いてくださいましたこと、お礼を申し上げます」

「ラヴィリア、よくぞ今日まで耐えてくれた。国の者を代表して礼を言おう」

「勿体無いお言葉です」

「さあ二人とも上がりなさい」

キールクラインは玉座への階段を登ろうとしたが、横を見るとラヴィリアがその衣裳のせいで階段を登るのにもたついていた。自分が手伝いを買って出てはいけないのでは、という考えが一瞬頭を過つたが、気づけば手を差し出した。

ラヴィリアはそれを見て声は出さず、『ありがとう』口を動かして感謝を伝える。二人は連れ立って階段を登ると、国王とクローディアの前で跪いた。

「さあクローディアよ。ここからはお前の出番だ」

「はい」

クローディアは、父王に促されると跪く二人の前に立った。

「まずは両名には感謝の意をささげます。今日まで数々の困難がその身にあったかと思えます。ありがとうございます、そしてこれからは臣下として頼みます」

「殿下、ありがとうございます」

体勢はそのまま謝意を伝える。

「キールクライン・フォン・ロイト、心してお聞きなさい。私が王位を就いた暁には、そなたは我が知識となり力となり、持てる力の全てを使いティシヤナ王国を更なる平和と繁栄へ導くことを、ここ

に誓いなさい」

「このキールクライン・フォン・ロイトは、殿下が王位に付いた暁には、殿下の知識となり力となり、全身全霊を持ってティシヤナ王国を更なる平和と繁栄へ導くことをお約束いたします」

「その誓い聞き届けました。クローディア・ルン・ティシヤナは、そなたを次期賢王に任命します。その位の証として、ここに賢王の杖を授けます」

クローディアは、傍らにいた賢王から黄金に近い飴色の宝玉を受け取ると、キールクラインに差し出した。

「拝命いたします」

キールクラインは、クローディアの手から宝玉を受け取った。

「そして、ラヴィリア・フォン・ファイファー、心してお聞きなさい。私がこのティシヤナ王国の王位を就いた暁には、そなたは我が力となり、民の声を聞く心になり、その持てる力の全てを使いティシヤナ王国を更なる平和と恵み多き国へと導くことを、ここに誓いなさい」

「殿下が王位に付いた暁には、このラヴィリアは殿下のお力となり、民の声を聞く心になり、力の全てを注ぎ、ティシヤナ王国を更なる平和と恵み多き国へと導くことをお約束いたします」

「その誓い聞き届けました。その誓いの証として代々巫女王になる者が受け継ぐサークレットを授けます」

ラヴィは跪いたままクローディアにサークレットを受けた。

「クローディア・ルン・ティシヤナは、そなたを次期巫女王に命じます」

「拜命いたします」

「さあ二人とも立ちなさい！　そして、そなたの力を皆に示すのです」

「はい」

キールクラインとラヴィリアは、クローディアに促され立ち上がった。そして王座の下に控えている人々の方に体を向けた。大勢の目は二人に注がれる。

二人はお互いを見合った。これから何をしなければいけないかを理解していた。

先にキールクラインが前に出た。

クローディアから受け取った宝玉は賢王の杖だった。魔力を注ぐ前はこの形をしている。そして幼少の頃より賢王から聞かされていて、これを杖に変化させるのが、試練の旅を完成させた証だと。これが出来なければ賢王になる資格はない。緊張してはいなかった。だが自分の鼓動が速いのが分かる。キールクラインは、何度も自分に言い聞かせていた。

——何も問題はない。何も。自分はきちんと試練を終えたのだから、証はある。

ゆっくり息を吐いて整えると、すっと目を閉じた。そしてキールクラインは、宝玉を握りしめている手を頭上に掲げた。

「賢王の杖よ、我が魔力に答えよ」

キールクラインは、宝玉に魔力を送り込んだ。その瞬間キールクラインの手の中から眩い光が室内を照らし出した。

目も眩むような眩しさに、人々は一瞬視界を奪われた。しかしキールクラインだけは、自分の手元

で起こっている現象をつぶさに見ていた。

光は手の中からこぼれ落ち、その姿を象り始めた。光は一本の長いラインになり、それはキールクラインの身長を越すほどある。その重さは羽根のように軽く、色は白銀色。光は金属へと変化した。

キールクラインは、賢王の杖を生まれてはじめて手にした。総オリハルコン製の杖、頭部には上品な細工の中に、巨大な魔力を感じるオーブがはめ込まれている。実に優美だが、その内在している威力を考えると、恐ろしくなる。見事、賢王の杖がキールクラインの手の中に現れた。

キールクラインが杖の具現化に成功したことによって、室内に再び歓声が巻き起こった。しかし、賢王の杖を具現化させたキールクラインは、そのまま微動だにしなかった。

賢王の杖からは、巨大なプレッシャーを感じていた。それは今まで扱ってきた杖が玩具に思えるほどのものだ。この杖こそ賢王になる者が受け継ぐにふさわしい杖だ。

そんなことを思う一方、賢王の杖のプレッシャーにかなり押され、少し気を抜けば意識を持っていかれそうになる自分がある。

——これは、予想以上だ。

その場にいる誰もが、キールクラインのその様子に気づくことはなかった。しかし、一人だけは違った。キールクラインの傍らに叔父にあたる現賢王が歩み寄ってきた。そして耳元でそつと呟いた。

その声は、室内の歓声で傍に居るラヴィリアやクロードディアにも届くことはなからう。

「キールクライン、今のお前ではその杖は少し荷が重たかろう、私に渡しなさい」

「しかし、叔父上」

キールクラインは、一瞬プライドが邪魔をした。

いくら自分が未熟とはいえ、この五年間賢王になるための試練の旅をしてきた。

それは幼い未熟な自分には命がけのものだった。死を覚悟する瞬間に出くわしたこともある。しかしキールクラインは、歯を食いしばり必死に試練を乗り越えてきた。賢王になりたいから頑張ったのではない。

この国に帰りがかった。自分を待つ人達に再び会いたかった。その思いが強かったから、乗り越えられた。おかげで、精神力も魔力も格段に上がった。多くの魔術を身に付け、賢者の中でも最高の技術と知識を貪るように吸収してきた。少なからず自信があった。それなのに今の自分は……そんな様子を見ていた賢王は、そっとキールクラインの肩に手をおいた。

「それで良いのだよ。賢王の杖は癖が強い。始めから扱える者などいないのだよ。私もね、先代に預かってもらったのだから」

キールクラインは、叔父の言葉に目を見張った。

「叔父上も、ですか？」

「そうだよ。そして先代は、私にこう言いなされた」

現賢王は、声のトーンを落としてキールクラインに耳打ちした。

「お前の守りたい者のために強くおなり」

キールクラインは、現賢王の顔を間近で見た。そこには幼い頃から見知った優しい叔父の表情があった。

「……はい」

キールクラインは、そういうと現賢王の方に体の向きを変えると杖を渡した。それによって室内は、さらに歓声が高まる。

「ここだけの話、皆には次期賢王が現賢王に杖を渡すのは伝統だと思われる。実際は……当人同士の秘密なのだけれどもね。次はキールクライン、お前が秘密を語る番だ」

「はい、賢王」

「いい返事だ」

キールクラインは、この物腰の柔らかな叔父を幼い頃から間近で見いていたが、今日ほど叔父の偉大さを感じることにはなかった。賢王の杖を持つても余裕さえ伺える。キールクラインは、真の賢王の何であるかを垣間見た気がした。現賢王は、キールクラインを促し国王とクロードディアに挨拶を交わした。そしてキールクラインは、賢王の傍らに立つことを許された。

一人残されたラヴィリアは、サークレットを頭の上に載せた。

衣裳は豪華なのに、なぜか髪飾りが質素だと思っていたが、そのサークレットを被ると彼女の姿はパズルのピースが全て合うかのように、完成された。そのサークレットのために、髪飾りが配置されていたのだ。室内は時計の針が落ちた音も聞こえてしまうように静まりかえる。

ラヴィリアは、一つ大きく息を吸うと、その喉から声を滑り出す。最初は小さな声ではじまったそれは、少しずつ大きくなってゆく。音響の良い謁見の間でラヴィリアの声は室内に響き渡る。彼女は詠いはじめた。決まった歌詞はない。神々や精霊にささげる祝詞だ。言霊に乗せて、神への信奉と自

然への恵みに感謝する。キールクラインは巫女ではないので、その言葉の意味が分かるはずもなく、しかしラヴィリアの声を聞いていると、何か暖かな物に包まれるような安らぎを感じた。

ほどなくして室内に風が巻き起こる。風に乗って入ってきたのか、無数の花びらが室内に舞い飛び始める。それは見たこともない光景だった。精霊たちがラヴィリアの声が届いた証として祝福しているのだ。目に見える現象が動く巫女の御業はそうそうない。

ラヴィリアの実力が示された。

ラヴィリアの祝詞が終わると、静かだった室内が夢から覚めたように、音が戻ってくる。再び今日何度目かのどよめきと歓喜の声上がる。

ラヴィリアは大衆にお辞儀をすると、迎えに来た巫女王の後に続いてその横に立った。

ラヴィリアは、自分を見ているキールクラインの視線に気がついたのか微笑んだ。そしてそれと同じように室内の人々に笑顔で応えている。

キールクラインは気づいてしまった。クロードディアとラヴィリア、二人の姿は雰囲気違って見えるではないか。彼女達は、これから国を導いてゆく立場と使命を感じている。

その表情は、決して恐れや戸惑いがないとは言えないが、大変凛々しかった。

キールクラインは、自分が国にいない間、自分と同じく見えないモノと戦って来た彼女たちを誇らしく感じた。それと同時に寂しさを感じていた。

自分だけがこっそり見ることの出来た宝物達。

太陽のような赤い宝石。優しく甘える紫の宝石。秘密の花園は、閉園を告げているのだと。